

宗
高
南
遺
跡

宗 高 南 遺 跡

社会資本整備総合交付金（防災・安全／街路）事業
（都）3.4.18号伊勢崎桐生線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書
3.4.18号伊勢崎桐生線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一四

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2014

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

宗 高 南 遺 跡

社会資本整備総合交付金（防災・安全／街路）事業
（都）3.4.18号伊勢崎桐生線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

「はばたけ群馬・県土整備プラン」は、群馬が未来に向けて大きくはばたいていくために、基本計画において、「もっと、県土に魅力を」を掲げて、群馬らしい魅力ある“まちづくり”を推進しています。県道桐生伊勢崎線の道路新設・拡幅事業は、安全で円滑な通行と、伊勢崎中心市街地の活性化のために実施されています。

本書で報告します宗高南遺跡は、伊勢崎駅南口に直結する計画路線域の伊勢崎市平和町に所在し、桐生伊勢崎線整備事業に伴い発掘調査された遺跡です。

調査は、群馬県伊勢崎土木事務所から委託を受け、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成24年度に実施しました。その結果、古墳時代の住居4軒や中世に構築された道路など、様々な遺構と遺物が発見されました。本遺跡で発見された中世の道路は、西方約1kmに位置する赤石城やその後の伊勢崎城へ向かう主要街道と考えられます。粕川の左岸には中世湖名荘の惣領守「殖木宮」赤城神社があり、中世の政治的な中核地域を結ぶ道路網の一端を明らかにすることができました。この度の成果は、地域史解明に寄与するものと考えております。

最後に、発掘調査の実施から本書の刊行にいたるまで、群馬県伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、並びに地元関係者の皆様には終始ご協力を賜りました。上梓にあたり、皆様方に心から感謝申し上げまして序といたします。

平成26年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 上 原 訓 幸

例 言

- 1 本書は社会資本整備総合交付金(街路)事業(都)3.4.18号伊勢崎桐生線に伴い発掘調査し、社会資本整備総合交付金(防災・安全/街路)事業(都)3.4.18号伊勢崎桐生線に伴い整理事業を行った埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、伊勢崎市平和町8-15、26、31、33、34、35である。
- 3 事業主体は群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所である。
- 4 発掘調査の主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
- 5 発掘調査の期間と体制は以下のとおりである。

調査履行期間	平成24年9月1日～平成24年12月31日
調査期間	平成24年10月1日～平成24年10月31日
発掘調査担当者	田村 博(主任調査研究員)、飯島義雄(専門調査役)
遺跡掘削請負工事	スナガ環境測定株式会社/委託 地上測量:株式会社シン技術コンサル
- 6 整理事業の発掘調査の期間と体制は以下のとおりである。

整理履行期間	平成25年12月1日～平成26年3月31日
整理期間	平成25年12月1日～平成26年1月31日
整理担当者	飯森康広(専門員(主幹))
- 7 本書作成の担当者は次のとおりである。

編集・本文執筆	飯森康広、デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)
遺物写真撮影	佐藤元彦(補佐(総括))、岩崎泰一(上席専門員)、大西雅広(上席専門員)、
保存処理	関 邦一(補佐(総括))
遺物観察	石造物:岩崎泰一/土師器・須恵器:徳江秀夫(資料統括)/土師器・須恵器年代比定: 神谷佳明(資料部長)/中近世陶磁器・土器:大西雅広/金属器:関 邦一
- 8 鑑定・委託 石材については飯島静男氏(群馬地質研究会)に同定していただいた。自然科学分析については(株)火山灰考古学研究所に分析委託した。
- 9 発掘調査および報告書作成に際しては、群馬県教育委員会・伊勢崎市教育委員会をはじめ、関係機関ならびに多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。記して感謝いたします。
- 10 宗高南遺跡の諸資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 遺構平面は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)を用いて測量した。遺構図中にある+印とそれに付記される数値は国家座標値X・Y値を表し、下3桁のみを記した。本文中に使用した方位は全て国家座標北を表している。真北との偏差は、調査区(東)中央付近で+0度22分26秒である。
- 2 遺構・遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構	住居・竪穴状遺構 1:60/カマド 1:30/井戸・粘土探掘坑・道路・復旧坑 1:60
	溝 1:40、1:80
遺物	土師器・須恵器 1:3/陶磁器・在地系土器 1:4/石造物 1:3、1:4
	金属器・金属製品 1:1

- 3 本書の図版に使用したスクリーントーンは次のことを表示している。

硬化面  焼土  攪乱 

- 4 住居の床面積は、デジタルプランメーターにより住居の壁の内側を3回計測した平均値である。住居の方位はカマドを持つ壁に直交する軸を主軸線とした。遺構の計測値で全体を計測できないものについては、現存の値を記載し()に表示した。
- 5 道路に伴う波板状遺構の個別計測については、両端部が凹む形状のため、軸部(中央部)と端部(北側)に分け、それぞれに最大幅・最大深を計測した。
- 6 土層観察の記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に基づいている。含まれる礫については、径5mm以上を大礫、径2～5mmを中礫、径1～2mmを小礫とした。
- 7 遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。
- ・土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に基づいている。
 - ・胎土表記中の細砂・粗砂・礫については、径2mm以上を礫、径2～0.2mmを粗砂、径0.2mm以下を細砂とした。
 - ・計測値の口：口径、胴：胴径、底：底径、高：器高、台：高台径、重：重さを示す。単位はcm・gである。
- 8 陶磁器の分類・掲載は以下に拠った。
- ・中世片口鉢は、使用痕からすると「すり鉢」と呼ぶべきであるが、従来の呼称に従った。破片の場合、すり目の有無が不明であることから、残存部のすり目の有無にかかわらず「片口鉢」とした。
 - ・片口鉢と内耳鍋の使用痕：器表が摩滅して下部の胎土が露出した範囲を実線、摩滅度合いが少なく平滑となった範囲を破線で表した。二次的な使用痕である底部外面周縁の摩滅は図示していない。
 - ・常滑窯系陶器・渥美窯系陶器は『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑系』2013による。
 - ・肥前陶磁器は『九州陶磁の編年-九州近世陶磁学会10周年記念-九州近世陶磁学会 2000』による。
 - ・12～13世紀の中国磁器は、横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集 4』九州歴史資料館 1978による。白磁の分類は森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』貿易陶磁研究会 1982による。
- 9 土器に関する分類上の大小は以下による。
- 須恵器：大型品(壺・甕類・羽釜・瓶類)、中型品(高杯・盤類・甕)、小型品(椀・杯・皿類)
- 土師器：大型品(壺・甕類・土釜)、中型品(高杯類・古式土師小型丸底壺など)、小型品(椀・杯類・手捏ね)
- 10 非掲載遺物は原則的に巻末の一覧表(第11表)で示した。また、中近世以降の遺構について、時期を判定する根拠になった場合は、本文中でも合わせて記した。
- 11 本書で使用した浅間山及び榛名山噴火による降下火砕物等の呼称は以下の表記をともに使用する。原則、一次堆積の場合はテフラ名(As-Bなど)を使用し、埋没土に含まれる場合は軽石名として、浅間B軽石などを使用した。
- 浅間A軽石：As-A(1783年) / 浅間Bテフラ：As-B(1108年) / 榛名ニッ岳火山灰：Hr-FA(6世紀初頭)
- 浅間C軽石：As-C(3世紀終末～4世紀初頭)
- 12 本書に掲載した地図は下記のものを使用した。
- 国土地理院発行地形図 1:25,000『伊勢崎』(平成15年2月1日発行)および「大胡」(平成22年12月1日発行)
- 国土地理院発行地形図 1:200,000「宇都宮」(平成18年4月1日発行)
- 伊勢崎市発行現況図29 1:2,500(平成22年10月測図)

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	
第1章 発掘調査の経過と方法	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査の方法	
1 調査区の設定	2
2 調査の方法	2
3 基本土層	2
第4節 整理作業の方法	4
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	
第1節 遺跡の立地	5
第2節 周辺の遺跡	6
第3章 発掘調査の記録	
1 概要	11
2 竪穴住居	11
3 井戸	17
4 粘土探掘坑	17
5 溝	20
6 道路	25
7 復旧坑	25
8 遺構外出土遺物	30
第4章 分析	
第1節 分析の目的	32
第2節 自然科学分析の結果	32
第5章 総括	
第1節 まとめ	36
第2節 中世に構築された道路について	36

挿 図 目 次

第1図	道跡位置図(国土地理院地勢図 1:200,000「宇都宮」 (平成18年4月1日発行)	1	第11図	2号住居カマドと出土遺物	15
第2図	調査位置図	2	第12図	3・4号住居出土遺物	16
第3図	調査位置図(伊勢崎市発行「伊勢崎市現況図29 1:2,500」 平成22年10月調査使用)	3	第13図	1号井戸	17
第4図	基本土層図	4	第14図	1号粘土探掘坑と出土遺物	18
第5図	道跡周辺の地形(1:200,000)『群馬県史通史編1』 (1990)付図2を使用一部改変)	5	第15図	2・3・4号粘土探掘坑と出土遺物	19
第6図	道跡周辺の地形分布図(群理工「喜多町道跡」(2011) 第98図を加筆修正して掲載)	5	第16図	1号溝(1)	21
第7図	周辺道跡の分布図(国土地理院発行地形図1:25,000 「伊勢崎」(平成15年2月1日発行)、「大胡」 (平成22年12月1日発行)使用)	10	第17図	1号溝(2)・4号溝	22
第8図	全体図	11	第18図	1号溝出土遺物	23
第9図	1号住居と出土遺物	12	第19図	2・3号溝と出土遺物	24
第10図	2・3・4号住居	14	第20図	1号道路(1)	26
			第21図	1号道路(2)	27
			第22図	1号復旧坑出土遺物	28
			第23図	1号復旧坑群と出土遺物	29
			第24図	道構外出土遺物	30
			第25図	分析地点の土層柱状図	35

表 目 次

第1表	周辺道跡一覧表	8・9	第7表	1号道路 波板状道構凹凸面計測表	28
第2表	1～4号住居出土遺物	16	第8表	1号復旧坑群出土遺物	29
第3表	1・2号粘土探掘坑出土遺物	19	第9表	1号復旧坑群計測表	29
第4表	1号溝出土遺物	23	第10表	道構外出土遺物	30
第5表	2号溝出土遺物	24	第11表	非掲載出土遺物集計表	31
第6表	1号道路出土遺物	28	第12表	テラコッタ分析結果	34

写真図版目次

P.L.1	1.調査区(中)全景(東から) 2.調査区(北)全景(西から) 3.調査区(北)全景(東から)	4.1号溝Bセクション(西から) 5.1号溝Cセクション(東から)	
P.L.2	1.1号住居全景(東から) 2.1号住居・2号溝セクション(南西から) 3.1号住居セクション(南から) 4.1号住居掘り方セクション(南から) 5.1号住居P1セクション(西から)	P.L.6	1.1号溝・1号道路調査区(中)部分全景(東から) 2.1号溝・1号道路調査区(中)部分全景(西から) 3.1号溝Dセクション(西から) 4.1号溝Eセクション(西から)
P.L.3	1.2号住居全景(南から) 2.2号住居カマド全景(南から) 3.2号住居セクション(南西から) 4.2号住居掘り方全景(南から) 5.2号住居P3セクション(南から)	P.L.7	1.2号溝全景(南から) 2.3号溝全景(南から) 3.3号溝・1号井戸セクション(南から) 4.1号道路A・Bセクション(西から)
P.L.4	1.3号住居全景(南から) 2.3号住居掘り方全景(南から) 4.4号住居掘り方全景(南から) 5.1号井戸全景(南から) 6.1号井戸下位セクション(南から) 7.1号粘土探掘坑全景(西から) 8.1号粘土探掘坑セクション(南から)	P.L.8	1.1号道路Aセクション(西から) 2.1号道路Bセクション(西から) 3.1号道路Fセクション(西から) 4.1号道路波板状道構Jセクション(北から) 5.1号道路波板状道構調査区(中)部分近景(北から)
P.L.5	1.2号粘土探掘坑全景(北から) 2.4号粘土探掘坑セクション(西から) 3.1号溝・1号道路調査区(西)部分全景(東から)	P.L.9	1.1号道路波板状道構古瓦出土状態(西から) 2.石器調査3号トレンチセクション(南から) 3.1号復旧坑群全景(東から) 4.1号復旧坑群全景(北から)
		P.L.10	1・2号住居出土遺物
		P.L.11	3・4号住居、1号粘土探掘坑、1号溝、1号道路、道構外出土遺物

第1章 発掘調査の経過と方法

第1節 調査に至る経緯

県道桐生伊勢崎線は、桐生方面と伊勢崎中心市街地を直結する幹線道路である。自動車の交通量が多いため、歩行者、自転車に安全に通行できるように、車道・歩道を広くすることを事業の目的に、平成16年度から事業化されている。本遺跡は計画区間(総延長800m)のほぼ中央に位置する。

平成24年9月1日に「平成24年度社会資本整備総合交付金(街路)事業(都)3.4.18号伊勢崎桐生線に伴う埋蔵文化財発掘調査」の委託契約が中部県民局伊勢崎土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の間で締結された。履行期間は平成24年9月1日から平成24年12月31日で、調査期間は平成24年10月1日から平成24年10月31日である。なお、現地での発掘調査終了後には調査実績にもとづき、平成24年11月26日に「変更委託契約」が締結された。

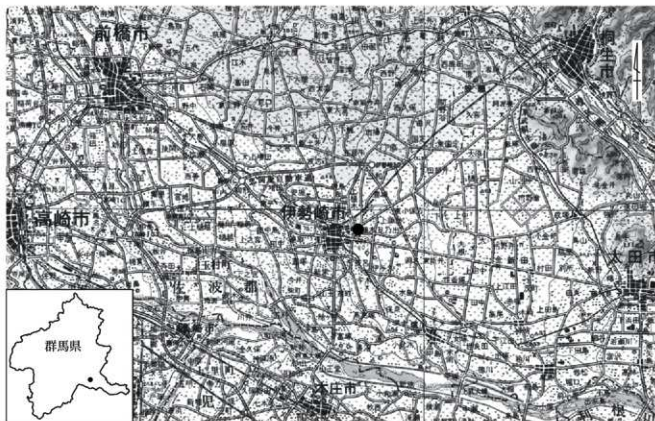
第2節 調査の経過

発掘調査は、平成24年10月1日～平成24年10月31日まで実施した。主な調査経過は以下のとおりである。

調査日誌抄録

平成24年(2012)

- 10月1日 表土掘削準備。
- 10月2日 重機により調査区(西)表土掘削開始。
- 10月3日 遺構確認。1号溝平面確認、掘削開始。
調査区(東)表土掘削開始。
- 10月5日 調査区(西)全景写真。
- 10月9日 調査区(東)1～4号住居調査開始。
- 10月11日 調査区(西)旧石器トレンチ調査開始。
- 10月12日 重機により調査区(中)表土掘削開始。
調査区(東)1～4号住居、1号粘土採掘坑完掘。
- 10月13日 調査区(東)全景写真。



第1図 遺跡位置図(国土地理院地勢図 1:200,000「宇都宮」(平成18年4月1日発行))

第1章 発掘調査の経過と方法

- 10月17日 調査区(東)調査終了。
10月18日 調査区(中)1号溝全景写真。旧石器調査トレンチ掘削。自然科学分析実施(火山灰考古学研究所)。
10月22日 埋め戻し。
10月29日 伊勢崎土木事務所による完了検査。明け渡し終了。
10月31日 調査資料の整備終了。

第3節 調査の方法

1 調査区の設定

発掘調査にあたって、調査区は単一名称とし、調査工程の都合で便宜的に調査区(西)、同(中)、同(東)と呼称し、調査の工程管理を図った。

グリッドの設定は、国家座標をそのまま利用し、旧石器調査トレンチの設定などを行った。

2 調査の方法

表土については重機によって掘削した。その後、人力による遺構確認作業を行い、遺構平面の確認後、埋没土層の確認用ベルトを任意に設定して移植ゴテなどで掘り下げた。遺構の掘削も人力によった。遺構番号は遺跡全体の通し番号とした。

遺構測量は、平面図については電子平板によるデジタル測量を、断面図については手実測で行った。住居、土坑、溝などの平面図・土層断面図は1:20で作成した。

遺構写真は、iso400ブローニー版モノクロフィルムを6×7cm判サイズで撮影し、カラー写真はデジタルカメラ(1200万画素)を使用してハードディスク及びDVDによるデータの記録保存を行った。

3 基本土層

本遺跡の基本土層は、調査区(東)で行った3号旧石器トレンチ北壁及びその延長部の調査区北壁によって作成した。なお、層厚や土質、テフラの混在状況は、第4章第2節の自然科学分析の成果をもとに記述した。

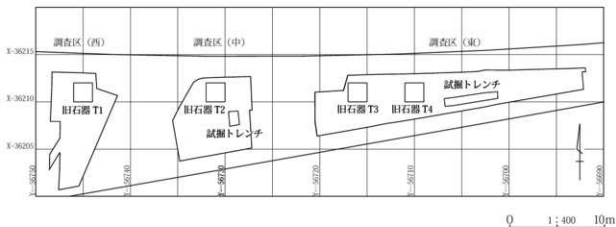
本遺跡は伊勢崎市中心市街地の住宅密集地に位置するため、表土下は宅地造成に伴う盛土が広く堆積している。それに伴い削平や擾乱も顕著であり、遺構確認面までの土層堆積は著しく乱れる。I層は観察面で4つに分層できたが、局所的な面を考慮して、一括して扱った。

II層は観察地点周辺で確認されたものであり、調査段階で浅間B軽石を含む、いわゆるB混土として認識できるものではなかった。

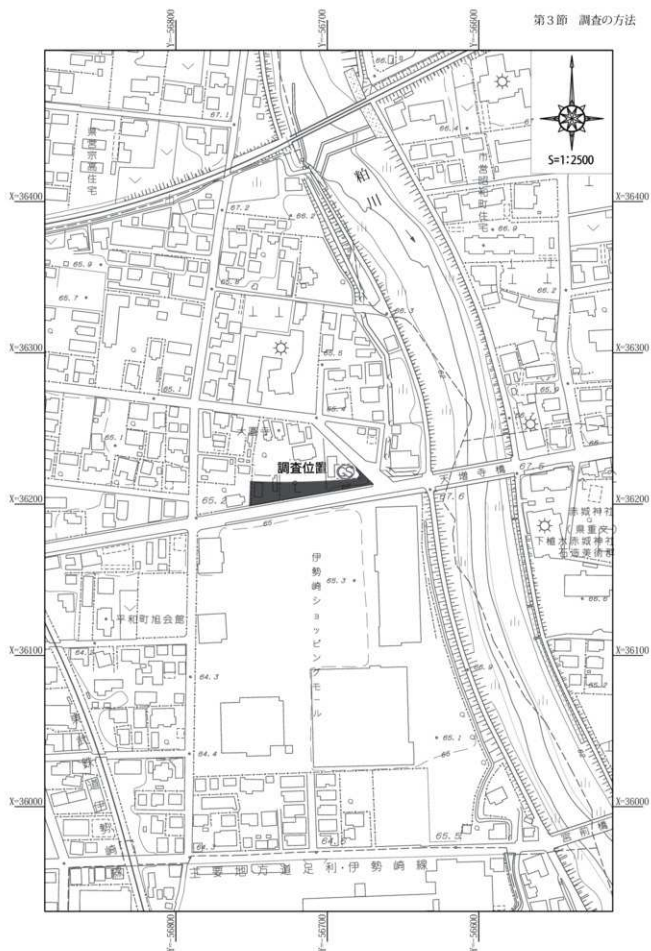
III層も観察地周辺での確認に止まる。自然科学分析では、層位的に弘仁9年(818)の赤城山南麓地震に関係した洪水堆積物の可能性が指摘されている。しかし、広域に及ぶ堆積物かどうか。今後の課題であろう。

IV・V層も乱れており、平面的に確認することが困難であり、VI層を遺構確認面として調査を行った。

VII層以下は旧石器トレンチ調査で確認したものであり、平面的な確認はされていない。トレンチ4か所すべてで同様な堆積が見られる。Xa・b層、XIa-c層は、遺跡の東を流れる粕川の氾濫による洪水堆積と思われる。



第2図 調査区配置図



第3図 調査位置図(伊勢崎市発行「伊勢崎市現況図29 1 : 2,500 平成22年10月測図使用)

第1章 発掘調査の経過と方法

- I層 灰褐色土 表土及び盛土。暗褐色土ブロック、黄色砂層を含む。
- II層 灰褐色土 浅間B軽石をわずかに含む。
- III層 黄色シルト質土 氾濫層。
- IV層 灰褐色土
- V層 褐色土 Hr-FAを含む。
- VI層 暗灰褐色土 浅間C軽石を含む。
- VII層 黒灰色土
- VIII層 灰褐色土 黄灰色砂ブロックを多く含む。
- IX層 暗灰色土 黄色砂を含む。
- Xa層 灰色砂質土 氾濫層。
- Xb層 明褐灰色シルト質砂 氾濫層。
- XI層 暗灰色土
- XIIa層 黒灰色土 粗粒火山灰を多く含む。
- XIIb層 暗灰色土

- XIIa層 にぶい橙色シルト 氾濫層。
- XIIb層 灰色シルト質砂 氾濫層。
- XIIc層 灰色砂 垂円礫を含む。

第4節 整理事業の方法

報告書作成のための整理事業は、平成25(2013)年12月1日から平成26(2014)年1月31日まで実施した。

出土遺物は洗浄され、遺跡略号、遺構名、遺物No.が注記されている。

整理事業では、遺物を種別・器種別に分類した。縄文土器、土師器・須恵器、陶磁器、石器・石製品等のそれぞれについて、接合・復元・写真撮影・実測・トレース作業を実施した。遺物の実測は手作業で実施したが、その一部については長焦点デジタルカメラと三次元計測システムで測定して素図を作成、最終確認を手作業で行い図化した。これらのトレースも手作業で行い、作成したものをスキャンしてデジタルデータ化して報告書掲載図とした。古銭、金属製品については錆落としの作業を実施後、実測等を行い、防錆処理を行った。

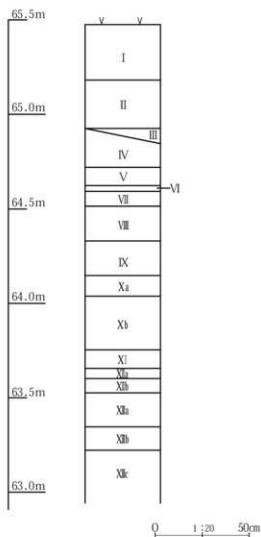
遺構図については平面図と断面図の照合・修正とレイアウト作業を行い、デジタルトレースを行い報告書掲載図とした。

遺構写真については報告書に掲載する写真の選定とレイアウトを行い、版下作成作業を実施した。遺物写真撮影は当事業団写真室でデジタルカメラを用いて行い、レイアウトをもとに加工・編集し、図版作成を実施した。

併行して本文・表・土層注記等の原稿執筆を行った。報告書の出稿にあたっては原稿、挿図、写真のいずれもデジタルデータ化を行った。

その後、校正作業を経て、平成26(2014)年3月に『宗高南遺跡』として発掘調査報告書(本報告)の刊行を行った。

報告書に掲載した資料は、管理台帳作成後、収納作業を行った。掲載されなかった遺物は、出土地区・遺構ごとに分類して収納作業を行った。



第4図 基本土層図

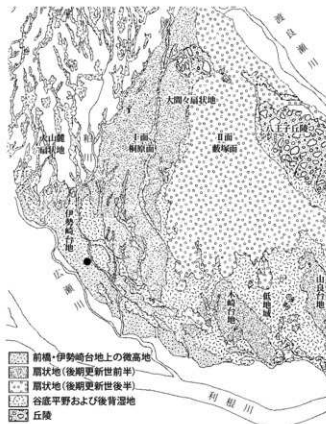
第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

本遺跡は伊勢崎市の東部を南北に流れる一級河川粕川の右岸に位置する。地形区分では赤城山南麓に形成された伊勢崎台地の縁辺部に位置し、東方には大間々扇状地が近接している。

赤城山の火山活動は約40～50万年前と言われ、古い順に古期成層火山形成期、新期成層火山形成期、中央火口丘形成期の3つの時期に区分される。古期成層火山形成期は、およそ13万年前頃まで続いたが、特筆すべき出来事として、約20～30万年前の梨木泥流の発生がある。梨木泥流は山体崩壊に起因する大規模な岩屑なだれで、波志江町から豊城町にかけて多くの泥流丘(流れ山)を形成させた。波志江町の稲岡や華蔵寺公園の小丘、豊城町の八寸権現山はその代表例で、伊勢崎市街で最も古い地形である。

一方、旧渡良瀬川は今から5～6万年前まで、みどり市大間々町で流路を南方向にとり、赤城山の裾野と八王



第5図 遺跡周辺の地形(1:200,000)
(『群馬県史通史編1』(1990)付図2を使用一部改変)

子丘陵の間を流れ、扇状地を形成した。旧渡良瀬川は、5万年前に早川以東へ流路が移り、粕川一早川間が離水して古期扇状地(桐原面)が形成された。その流路も2.3万年前に八王子丘陵の東へ移り、早川一八王子丘陵間が離水(台地化)し、新期扇状地(藪塚面)が形成された。

本遺跡が立地する伊勢崎台地は、旧利根川(現広瀬川)によって形成された微高地に区分される(『群馬県史』通史編1)。しかし、岩崎泰一は前橋市東部地域及び伊勢崎市の遺跡分布と縄文時代の洪水層の関係を分析した結果から、複雑な「伊勢崎台地上の微高地」の形成過程を指摘する。「一つは神沢川右岸に広がる縄文早期より古い扇状地(荒砥扇状地)で、一つは神沢川右岸に広がる新期扇状地(縄文前期から中期に形成、仮称波志江扇状地)、これとほぼ同時期に粕川左岸に扇状地(仮称彌蓮扇状地)が形成された」(岩崎2011)とする。本遺跡は粕川右岸縁辺にあり、明確な分別は難しいが、新期扇状地に位置することは確かである。

粕川は弥生時代以降も氾濫を起こしたと考えられる。



第6図 遺跡周辺の地形分布図
(『群文「真多町遺跡」(2011)第98図を加筆修正して掲載)

調査過程では明確な洪水層を認識できていない。しかし、自然科学分析(第4章第2節)では弘仁9年(818)の赤城山南麓地震に関係した洪水堆積を想定しており、今後の検討課題と言える。

引用文献

・岩崎泰一 2011 「縄文期洪水層と遺跡分布」『喜多町遺跡』財団法人群馬県歴史文化財調査事業団第519集

第2節 周辺の遺跡

伊勢崎市では、これまで旧市域北部で高速道路や工業団地造成などに伴う大規模な発掘調査があり、豊富な調査成果が得られている。反面、本遺跡が位置する市街地の発掘調査は、非常に少ない状況である。以下、歴史的環境について主な遺跡を中心に、時代を追って記述する。なお、文中の(○)番号は第7図の遺跡番号に対応している。

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は、大間々扇状地棚原面や赤城山南麓地域に点在している。波志江西宿遺跡(31)では後期旧石器時代3時期の石器群、光仙房遺跡(35)では「ホロカ型」の細石刃核を有する石器群と、槍先形尖頭器を主体とする石器群の2つの文化層が調査された。三和工業団地Ⅰ～Ⅳ遺跡(37・No無・41・42)では、4枚の文化層からなる石器群が広範囲に点在している。このうち、同Ⅳ遺跡第1文化層の細石刃石器群と同Ⅰ遺跡第4文化層の暗色帯中の石器群は、量及び内容とも卓越している。本遺跡周辺は伊勢崎台地を形成した洪水層によって覆われているため、遺跡が発見できないと考えられる。

縄文時代 縄文時代の洪水層は縄文時代前期後半と中期前半に堆積し、北関東自動車道以南の更新世の台地を埋没させ、洪水以前の遺跡の分布は断片的にしかわからない状況である。草創期では、五目牛新田遺跡(33)で竪穴住居などが発見された。間之山遺跡(22)でも同時期の土器片が出土している。早期では、波志江中屋敷遺跡(27)で住居2軒や縄文系土器、押型土器が出土している。前期段階になると、扇状地内の湧水地点付近に面した台地上に、小規模な集落が営まれている。三和工業団地Ⅱ～Ⅳ遺跡(No無・41・42)、舞台遺跡(36)などで集落の調査が行われている。中期段階は、湧水地点や小河川を望む台地上に広がり、大規模な集落を展開する。天ヶ堤遺跡では、中期後半～後期初頭の集落が確認されている。

本間町古墳群(52)では後期初頭の柄鏡形敷石住居1軒が調査されている。晩期の遺跡は激減し、市域では神沢川左岸に八坂遺跡が知られている程度である。

弥生時代 遺跡は広瀬川北側の微高地上に分布し、中期から営まれ始めるが遺跡数は少ない。主な遺跡として、西太田遺跡(安堀町)で中期の住居3軒、後期の住居1軒が調査されている。本遺跡周辺では、間之山遺跡(22)で後期の住居1軒が発見されている。

古墳時代 伊勢崎市北部から前橋市東部地域は、県内でも古墳が多く確認されている地域である。『上古古墳総覧』によると、伊勢崎市三和町、本間町、豊城町など鐘蓮地区で338基、波志江町、安堀町、太田町の三郷地区で105基の古墳が確認されている。華蔵寺裏山古墳(49)は、4世紀後半に築造された前方後円墳(後方墳との見方あり)とみられ、本地域では最古級の古墳である。しかし、この時期の墓制は周溝墓も多く、舞台遺跡(36)などがある。5世紀を代表する古墳はお富士山古墳(安堀町)で、市内最大規模の前方後円墳であり、長持形石棺を有している。5世紀末は蟹沼東古墳群(59)などが展開する。主に6世紀から7世紀にかけて形成された本間町古墳群(52)のうち、一ノ岡古墳(51)は6世紀後半の築造で横穴式石室を伴う前方後円墳である。同遺跡C区2号墳(円墳)の主体部では、「赤玉」(赤色球状未焼成土製品)が出土している。「赤玉」は、平成24年度に発掘調査され、「甲を着た古墳人」の発見で話題となった金井東夷遺跡(渋川市)でも出土し注目を集めている。7世紀に入ると前方後円墳は築造されなくなり、群集墳が築かれることとなった。

前期の集落は大規模な集落が見られ、舞台遺跡(36)では住居149軒や方形周溝墓が調査されている。中期の集落遺跡は少ない。後期になると再び集落が増加する。周辺では宗高遺跡(2)で51軒の住居が調査されている。本遺跡の住居も同時期である。

飛鳥・奈良・平安時代 伊勢崎市域の大半は、古代行政区分の佐位郡にあたる。その中心とされる鐘蓮地区の三軒屋遺跡(7)では多くの倉庫とともに八角形の倉庫が確認され、佐位郡衛正倉と位置づけられている。その北方

約400mに位置する上植木廃寺(19)は、7世紀後半に創建された寺院である。三軒屋遺跡の東方約100mに位置する大道西遺跡(8)と、西北方向へ約400m離れた南久保遺跡(9)では、古代に遡ると考えられる道路状遺構が調査されている。集落遺跡では、8世紀の集落は少なく、9世紀になって増加する。舞台遺跡(36)では住居51軒に加え須恵器窯12基が調査されている。隣接する光仙房遺跡(35)でも住居50軒と須恵器窯12基が発見されている。

中世 伊勢崎市域は中世の測名荘と一致し、一部単位で立荘されたとみられ、別称として佐位荘とも西荘とも呼ばれている。測名荘は白河法皇を弔うために、大治5年(1130)に建立された仁和寺法金剛院領であり、荘園成立もこの頃と考えられている。成立には秀郷流藤原氏が「測名大夫」と名乗った藤原兼行が関与したとされる。測名荘の開発に際しては、前橋地域から導水を計画し未完に終わったという女堀の存在が知られている。

測名荘を支配した藤姓足利氏は治承・寿永の内乱期に没落し、測名荘は京都から鎌倉へ下った法曹官僚中原氏に与えられ、その没落後の支配は判明しない。室町時代に入ると、北部では藤姓赤堀氏、南部では大江姓那波氏の活躍が顕著となる。享徳の乱(享徳3年(1455)～文明14年(1483))の緒戦段階では、古河公方方の赤堀時綱が活躍した。同じく公方方の岩松持国は、享徳4年3月茂呂(伊勢崎市)を攻めて支配下とする。公方方は緒戦段階で、上野国内では広瀬川以東に勢力基盤を形成した。関東管領上杉方の反撃は康正2年(1456)から開始され、1月には利根川渡河点の福島橋(玉村町)を突破し、植木・赤石(伊勢崎市)で合戦が行われる。赤石は伊勢崎の古名である。上杉方は勝利し、深津から赤堀へ攻め込んだ。赤石周辺も広瀬川の渡河点であったと推測される。赤石ではその後赤石城(67)が築かれる。この城は、本遺跡の西方約1kmに位置する。永禄3年(1560)初めて関東に進出した長尾景虎(のちの上杉謙信)は、赤石城を攻め那波氏を滅ぼした。

中世の生活を示す事例として、「^{ウツキ}樹市」の存在がある。「念仏往生伝」という記録に記された市場であり、五日市であったという。赤堀の畷入道という人物が訪れている。「樹」は植木であり、駅の転訛した地名と考えられ、古代東山道佐位駅に由来するという。上植木地内に比定され

るが、位置は特定されていない。市内ではほかに波志江市の存在も確認できる。また、本遺跡東方で粕川を挟んだ対岸約60mに位置する赤城神社(73)は「竈木宮」と言い、測名荘総鎮守のひとつであった。境内には観応2年(1351)の宝塔や貞治5年(1366)の多宝塔を含む石造物群(県重文)が造立されている。本遺跡周辺が当時の中核的な地域であったことは間違いないだろう。南西約800mに位置する植木館(63)は、戦国末期武田信玄によって滅ぼされた総社長尾氏(植木長尾氏)が、上杉謙信によって植木郷に配置された居宅である。

発掘調査された中世の遺跡では下植木志町田遺跡(39)があり、14～16世紀に及ぶ屋敷遺構が調査されている。また、波志江町では波志江中屋敷西遺跡や波志江中屋敷遺跡などで屋敷遺構が集中して調査されている。

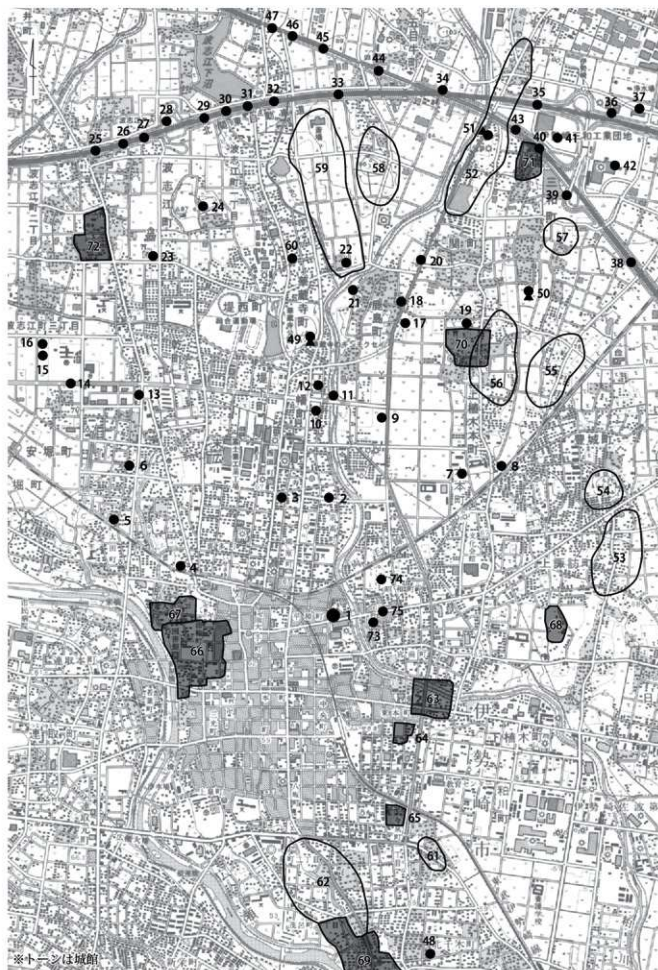
近世 天正18年(1590)徳川家康が関東に入部すると、松平家康が1万石を知りて那波城に入った。慶長6年には稲垣長茂が、同じく1万石を封じて伊勢崎城(66)に入城した。伊勢崎城下町はこの段階で整備され、菩提寺として天増寺(74)が建立された。本遺跡の東方近い粕川に架かる天増寺橋は、この寺に由来している。天増寺境内には貞和2年(1346)の紀年銘のある宝塔が造立されている。また、那波小太郎の墓碑と伝承される宝篋印塔もあり、中世に前身の寺院があったことを思わせる。寛政10年(1798)に書かれた「伊勢崎風土記」では、天増寺は初め糟川寺と号し、注釈では跡地に稲垣氏が新たに天増寺を開創したものとしている(渡辺1967)。天増寺橋に関しては、天曆12年(1762)に造立された橋供養地蔵尊(75)が現存している。この際の供養は、天増寺住職が行った。梁瀬大輔氏によれば、「近世天増寺の前身と思われる中世寺院の「糟川寺」という寺号が示すとおり、天増寺は歴史的・地域的に河川という特異な場と密接な関係を持つ寺院である」としている(梁瀬2012)。天増寺橋はいつから架けられていたものか判然としないが、中世まで遡る可能性は高いだろう。なお、遺跡北側に隣接する大圓寺は明治43年(1910)建立である。

引用文献
梁瀬大輔2012「中近世の架橋網 一渡河点寺院と橋供養一」『武尊通信』第131号、1-3
渡辺敦枝1967『伊勢崎風土記』『群馬県史料集』第二巻風土記Ⅱ、104-105

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	●遺跡 凸部跡 □水田							概要
			●集落・講等 石・正円 寺社	●遺跡 縄文	凸部跡 弥生	□水田 奈良 平安	□中世	□近世		
1	宗高南遺跡	平和町				○	○	○	本製書遺跡	
2	宗高遺跡	宗高町				○	○	○	古墳後期住居51棟、平安住居13棟、土瓦墓	
3	右町遺跡	春町				○	○	○	奈良・平安の住居35棟、皇朝2下館跡・平安・土田・出上	
4	喜多町遺跡	喜多町	○			○	○	○	遺、甕、白灰層など東海路の跡を示す古墳時代前期の土器が出土。古墳時代前期-中期の住居、縄文時代中期後半-後期前半の住居跡。	
5	宮下遺跡	太田町				○	○	○	古墳、奈良、平安時代。	
6	本郷下遺跡	安郷町				○	○	○	古墳、奈良、平安時代。	
7	三軒屋遺跡	上植木本町				○	○	○	上野原佐位郡高正倉跡、八角形礎石建物、大型礎石建物、独立柱建物、壁2建物、区画溝、統治工房など。	
8	大道西遺跡	費城町	△	△	○	○	○	○	古墳時代前期の住居、土坑、佐位郡跡へ続く古代の道路遺構、平安時代の水田、高、中近世の土坑など。	
9	南久保遺跡	鹿島町	△			○	○	○	古墳時代の住居跡・高・部倉併行跡の道路遺構。平安時代の水田(上・下)・溝、中世の短葺・独立柱建物、縄文時代前期後半・中期後半、後期前半の土器が出土。	
10	八幡町遺跡	八幡町				○	○	○	古墳時代後期跡6住居跡6軒、溝、井戸、土坑、ヒット、堀より石製物品出土。	
11	八幡町遺跡①	八幡町				○	○	○	古墳時代中期の住居跡、井戸、溝跡、土坑跡。	
12	八幡町遺跡②	八幡町				○	○	○	古墳時代中期・後期の住居跡、平安・近世の溝跡。	
13	本郷上遺跡	太田町				○	○	○	古墳、奈良、平安時代。	
14	中組遺跡	安郷町	△	●					奈良時代前期から古墳時代前期の土器、古墳時代前期の方形周溝墓、奈良・平安時代の住居跡。	
15	中組遺跡	波志江町				○	○	○	古墳時代住居跡前1棟・中組4棟、奈良・平安時代21棟、土坑、井戸。	
16	中組遺跡	波志江町				○	○	○	奈良・平安時代の住居跡、溝跡。	
17	新屋敷遺跡	本郷町・鹿島町				○	○	○	古墳時代前期、平安時代の住居、方形遺構、井戸など。	
18	上西組遺跡	鹿島町		●					古墳時代中頃から後期の住居、方形周溝墓、奈良時代の住居など調査された(伊勢崎市教委調査)。	
19	上植木寺寺	上植木町他						記	7世紀後半の寺院跡、伽藍配置や寺院に関連する建物など。	
20	間遺跡	本郷町・鹿島町				○	○	○	古墳時代から奈良・平安時代の住居跡7軒、住居から佐位郡に亘る土器出土した(伊勢崎市教委調査)。	
21	上西組遺跡	鹿島町		●		○			古墳時代前期-奈良・平安時代の住居跡3棟、方形周溝墓5棟、石堀1溝、溝15条、中近世の井戸33棟。	
22	関之山遺跡	波志江町	△	○	●				常陸直東古墳群の南端部で関之山丘陵にかかる遺構を名称変更して関之山遺跡とした。縄文時代前期の土器片、奈良時代後期の住居跡1軒、古墳時代前期の住居跡1軒、方形周溝墓。	
23	西福河遺跡	波志江町				○	○	○	古墳時代の溝、奈良・平安時代の溝、井戸。	
24	波志江権現山遺跡	波志江町	△						縄文時代前期土器・土器・標文土器・押文土器・文字など石器等確認。	
25	同屋敷遺跡	波志江町	△				○	○	旧石器時代後期遺跡、古墳時代後期集落、粘土採掘坑跡、中世墓、短葺墓など。	
26	波志江中屋敷西遺跡	波志江町	△	○	○	○	○	○	縄文時代、弥生時代の土坑、古墳時代水田、古墳時代から平安時代の溝、土坑、奈良・平安時代の住居、溝、水田、高、中世短葺墓、溝、溝、独立柱建物、井戸、土坑、土瓦墓、近世の短葺墓、土坑等。	
27	波志江中屋敷東遺跡	波志江町	○	○	○	○	○	○	縄文時代早期の住居、集石遺構、古墳時代から平安時代の住居、溝、水田、高、中近世の短葺墓、溝、溝、独立柱建物、井戸、土坑、近代の短葺墓など。	
28	田中田遺跡	波志江町				□	□	□	古墳時代の水田、平安時代の水田、古田の土坑。	
29	波志江中屋敷東遺跡	波志江町	○	△	○			○	縄文時代の土坑、集石遺構、弥生時代の土器、古墳時代の木製品・木器が出土した水田、溝、中近世の土坑、近世の溝など。	
30	伊勢山遺跡	波志江町	△	△	△			○	旧石器時代の石器、縄文時代土器・石器、古墳時代前期土器、近世墓、溝、土坑等。	
31	波志江西宿遺跡	波志江町	△	△	△	○	○	○	旧石器時代前期の石器群、縄文時代土器、弥生時代の土器など出土した。古墳時代前期住居跡、独立柱建物2棟、土坑等、中近世独立柱建物1棟、建物跡1棟、井戸24基、溝45条、土坑など。	
32	波志江中宿遺跡	波志江町	△	△	△	○	○	○	旧石器時代の石器、奈良・平安時代の住居、古墳時代前期の粘土採掘坑、木製品、水田、中近世の独立柱建物、井戸など。	
33	五日牛新田遺跡	五日牛町							縄文時代前期の住居、土坑、集石遺構、前期の住居、古墳時代前期の住居、古墳時代から近世の独立柱建物、古代から近世の土坑や溝など。	
34	五日牛清水田遺跡	五日牛町				○	○	○	縄文時代前期の住居、古墳時代の住居、水田、井戸跡が確認。奈良・平安時代の住居、独立柱建物、溝、溝、溝、溝、溝、水田、中近世の独立柱建物、溝、井戸、墓跡など。	
35	光仙阿遺跡	三郷町	△			○	○	○	旧石器時代第1、第2文化層、古墳時代前期後半の円墳、集落、粘土採掘坑、平安時代の集落、渠系遺構跡。	



第7図 周辺遺跡の分布図(国土地理院発行地形図1：25,000「伊勢崎」(平成15年2月1日発行)、「大洲」(平成22年12月1日発行)使用)

第3章 発掘調査の記録

1 概要

本遺跡では古墳時代の竪穴住居4軒を検出した。中世以降では、道路1条と溝1条、粘土採掘坑4基、復旧坑群1か所がある。また、時期の特定できない遺構として、井戸1基、溝3条を検出した。多くの遺構は、調査区(東)に集中している。

2 竪穴住居

調査区(東)の東半部で、4軒が集中して検出された。時期は出土遺物及び重複関係からすべて古墳時代に比定される。

1号住居(第9図、P.L. 2・10、第2表)

位置 調査区(東)。X軸36208～36212、Y軸-56705～-56708

重複 1・2号溝より前出である。

形状 重複により多くを消失するが方形と思われる。

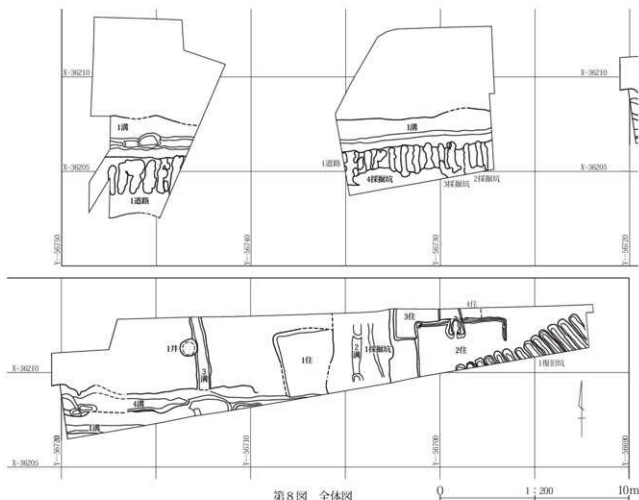
主軸方位 残存長辺でN-12°-W。

規模 面積(8.21)㎡。南北(3.69)m、東西(3.25)m、残存壁高は32～57cmを測る。

床面 全体に堅くしまる。貼り床は見られない。

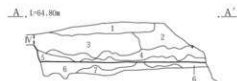
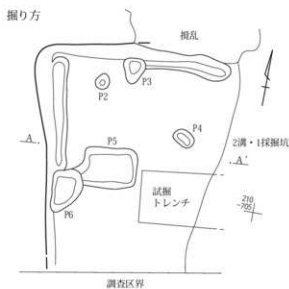
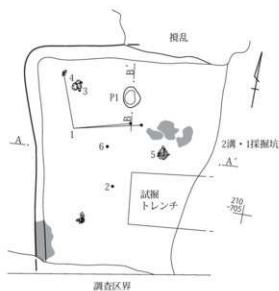
カマド・炉・貯蔵穴 調査範囲では確認できなかった。

柱穴 使用面北壁寄り中央でP1、掘り方面でP2～6を検出した。柱穴の規模(長径・短径・深さcm) P1:33・27・10、P2:25・22・8、P3:41・36・8、P4:35・24・6、P5:(102)・65・12、P6:75・50・15。



第8図 全体図

第3章 発掘調査の記録

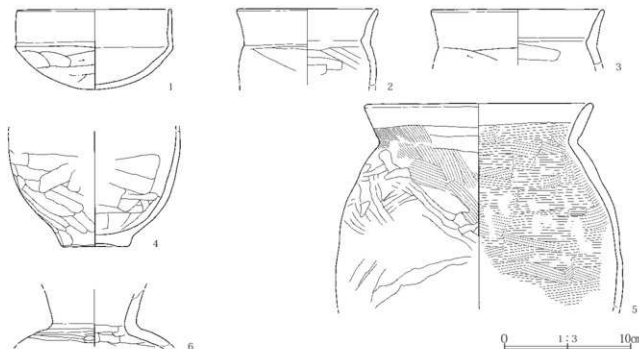


1号住居 P1
1 暗褐色砂質土 褐灰色土小ブロック5%、炭粒1%含む。

1号住居

- 1 暗褐色土 白色粒・炭粒含む。しまりなくボソボソした土。
- 2 灰褐色土 黄褐色土大ブロック10%、白色粒1%含む。
- 3 灰褐色土 黒褐色土大ブロック・黄褐色土大ブロック20%含む。
- 4 黒褐色土 黄褐色土大ブロック10%、白色粒・炭粒1%含む。
- 5 褐灰色砂質土 炭粒1%含む。
- 6 暗褐色砂質土 黄褐色土大ブロック40%、黒褐色土大ブロック10%含む。堅くしまる。
- 7 黒褐色土+黄褐色土大ブロック 堅くしまる。

0 1:60 2m



第9図 1号住居と出土遺物

埋没土 2～4層は黄褐色土ブロックの混入が著しく、土壌攪乱を受ける。下層の堆積状況から自然埋没と考えられる。

掘り方 観察面で最大約20cm掘り込まれている。埋没土は黄褐色土ブロックを多く含む。中央部西寄り土坑状に掘り込まれる。

出土遺物 床面及び床面近くから全体として散漫に出土した。

時期 出土遺物から6世紀前半に比定される。

2号住居(第10・11図、P.L.3・10、第2表)

位置 調査区(東)。X軸36209～36212、Y軸-56696～-56701

重複 1号復旧坑より前出で、3・4号住居より後出。

形状 南半部は調査区域外となるが方形と推定される。

主軸方位 N-4°-W

規模 面積(8.88)m²。南北(2.95)m、東西(4.95)m、残存壁高は5～43cmを測る。

床面 全体に堅くしまる。貼り床は見られない。

カマド 北壁中央西寄りに設けられ、燃焼部は住居内に位置する。煙道部は確認できなかった。カマドの燃焼部の長さは94cmで、全幅は104cm、確認面から燃焼部面までの深さは30cmである。焚き口幅は30cmである。全体によく使用され、燃焼部は全体に焼土化する。両袖ともに明褐色粘土を芯材として構築する。掘り方の規模は住居内側で長径40cm短径27cm深さ5cm、壁面外側の規模は長軸26cm短軸15cm深さ18cmである。

貯蔵穴 確認できなかった。

柱穴 床面で3基、掘り方で10基を検出した。柱穴の規模(長径・短径・深さcm)P1:29・29・6、P2:30・27・9、P3:26・20・12、P4:21・19・21、P5:46・31・36、P6:29・16・3、P7:28・23・4、P8:22・19・13、P9:33・30・21、P10:39・32・13、P11:(61)・(40)・13、P12:63・(30)・10、P13:25・21・5。

周溝 カマドを除く北辺全体から東辺にめぐる。規模はカマド東側で長さ337cm幅17～27cm深さ8cm、西側で長さ165cm幅25cm深さ5cmである。

埋没土 住居東半部の埋没土は攪乱を著しく受ける。西半部埋没土の堆積状況から自然埋没と考えられる。

掘り方 中央部を方形に掘り残す状況で、壁面までを平

坦に掘り込む。深さは観察面で最大約20cmを測る。埋没土は黄褐色土ブロックをやや多く含む。

出土遺物 カマド内部及び前面で集中して出土した。燃焼部では完形や完形に近い土師器杯(第11図2)、同小型甕・甕(同5・9)が出土している。

時期 出土遺物から6世紀前半に比定される。

3号住居(第10・12図、P.L.4・11、第2表)

位置 調査区(東)。X軸36211～36213、Y軸-56700～-56702

重複 2号住居より前出である。

形状 北半部は調査区域外となるが方形と思われる。

主軸方位 残存長辺でN-87°-E。

規模 面積(2.21)m²。南北(1.71)m、東西(2.55)m、残存壁高は26～32cmを測る。

床面 全体に堅くしまる。貼り床は見られない。

カマド・貯蔵穴・柱穴 調査範囲では確認できなかった。

埋没土 褐色土ブロックをやや多く含む。観察面が少なく埋没状況は不詳である。

掘り方 全体的な掘り込みは確認できず、中央部に不整円形の掘り込みが見られる。規模は長径(85)cm短径60cm深さ16cmである。

出土遺物 出土量は少なく、埋没土から土師器杯(第12図1・2)が出土する。

時期 出土遺物から6世紀前半と思われる。

4号住居(第10・12図、P.L.4・11、第2表)

位置 調査区(東)。X軸36212・36213 Y軸-56698・-56699

重複 2号住居より前出である。

形状・主軸方位 残存状況が悪く、形状・主軸方位は不明である。

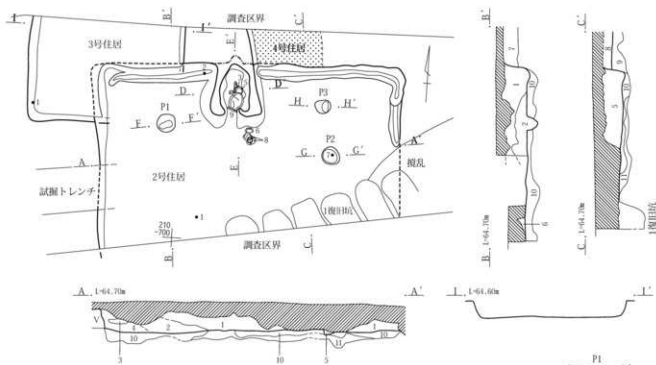
規模 面積(0.57)m²。南北(0.65)m、東西(1.18)m、残存壁高は19cmを測る。

床面 西側が堅くしまる。貼り床は見られない。

カマド・貯蔵穴・柱穴 調査範囲では確認できなかった。

埋没土 夾雑物が少ない黒褐色土である。観察面が少なく埋没状況は不詳である。

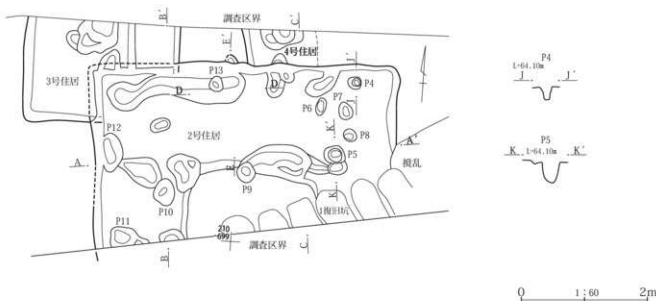
掘り方 全体的な掘り込みは確認できず、調査区界に接して不整円形の掘り込みが見られる。規模は長径(66)



2～4号住居

- 1 黒褐色土 褐色土小ブロック5%、黄褐色粒・白色粒1%含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒1%含む。
- 3 にぶい黄褐色土ブロック
- 4 にぶい黄褐色土 黄褐色土小ブロック・黒褐色土小ブロック10%含む。しまりなくボソボソした土。
- 5 黒褐色土 黄褐色粒1%含む。
- 6 にぶい黄褐色土ブロック
- 7 黒褐色土 褐色土小ブロック20%含む。
- 8 黒褐色土 黄褐色粒1%含む。
- 9 黒褐色土 黄褐色土大ブロック40%、黄褐色粒・炭粒1%含む。堅くしまる。
- 10 暗褐色土 褐色土大ブロック10%含む。堅くしまる。
- 11 褐色土 暗褐色土小ブロック10%含む。非常に堅くしまる。

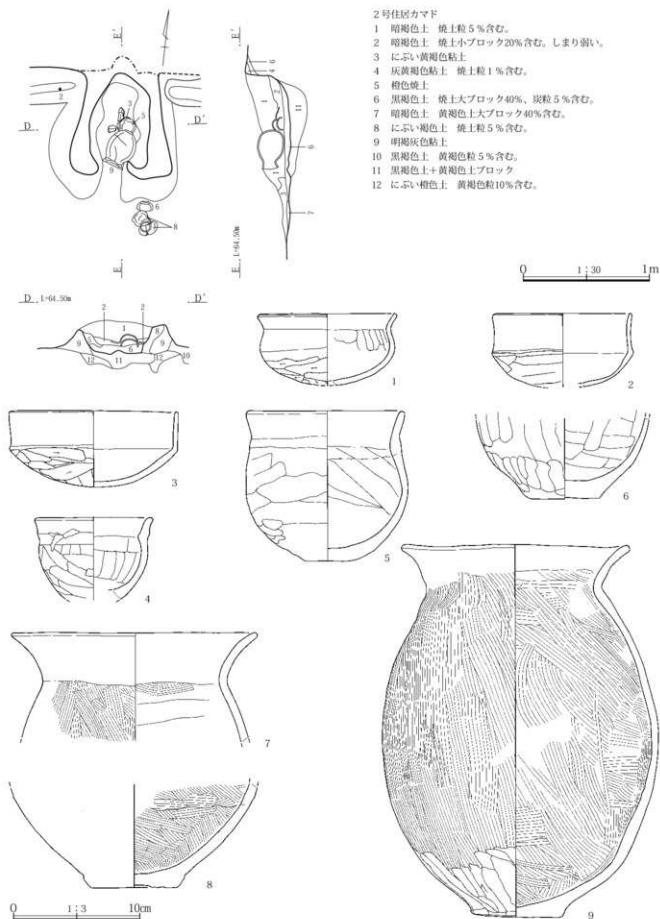
掘り方



第10図 2・3・4号住居

2号住居カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒5%含む。
- 2 暗褐色土 焼土小ブロック20%含む。しまり弱い。
- 3 にぶい黄褐色粘土
- 4 灰黄褐色粘土 焼土粒1%含む。
- 5 褐色焼土
- 6 黒褐色土 焼土大ブロック40%、炭粒5%含む。
- 7 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。
- 8 にぶい褐色土 焼土粒5%含む。
- 9 明褐色粘土
- 10 黒褐色土 黄褐色粒5%含む。
- 11 黒褐色土+黄褐色土ブロック
- 12 にぶい褐色土 黄褐色粒10%含む。



第11図 2号住居カマドと出土遺物

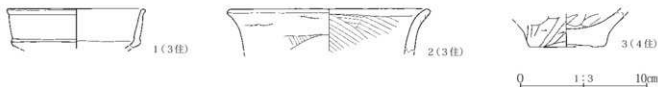
第3章 発掘調査の記録

cm短径(32)cm深さ21cmである。

時期 出土遺物から6世紀前半と思われる。

出土遺物 出土量は少なく、埋没土から土師器甕(第12

図3)が出土する。



第12図 3・4号住居出土遺物

第2表 1～4号住居出土遺物

採掘No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第9図 PL.10	1	土師器 杯	1住 +2 3/4	口	12.2	高 6.3	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/良好/橙	口縁部は直立気味に立ち上がり、先端に向かって徐々に器 肉を薄くする。底部との境には稜をなす。口縁部は横ナデ 外面底部は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	内外面摩 滅。
第9図	2	土師器 小型甕	1住 床直 口縁部片	口	11.0		粗砂粒/良好/褐	口縁部は横ナデ。外面製部は縦位のハケ目を斜位にナデ削 す。内面は強いタッチのヘラナデ。	外面にわ ずかに炭 素吸着。
第9図	3	土師器 小型甕	1住 床直 口縁部片	口	13.4		粗砂粒/良好/赤 い褐	内面は製部への変換点に小さな稜をなす。口縁部は横ナデ 外面製部は斜位縁のヘラ削り。内面は粗雑な横位のナデ。	
第9図 PL.10	4	土師器 小型甕	1住 +4 胴部下平～底 部	底	5.2		粗砂粒/良好/灰 褐	底部は平底。中央部分がへこみ周縁部分が輪状を呈する。 外面製部は斜・横位のヘラナデ。内面は横位のヘラナデ。	内外面と も炭素吸 着。色調 黒色。
第9図 PL.10	5	土師器 小型甕	1住 +5 口縁～胴部中 位1/3	口	17.6		粗砂粒/良好/赤 褐	口縁部は横ナデ。下半部にハケ目を残す。外面製部はハケ 目の上にヘラナデを重ねるが非常に粗雑。内面は横位にハ ケ目を充填する。	内面炭素 吸着。
第9図 PL.10	6	土師器 盃(切)	1住 床直 口縁部下平～ 胴部片				精選・細砂粒/少 好/明赤褐	口縁部は横ナデ。外面製部は縦位にナデ。内面は横位に粗 雑なナデ。	
第11図	1	土師器 杯	2住 +10 口縁部～底部 片	口	10.7	高 5.6	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/良好/明赤 褐	器肉薄く軽量。口縁部から体部上位は横ナデ。体部から底 部は手持ちヘラ削り。内面上位は指ナデ。以下はナデ。	
第11図	2	土師器 杯	2住 間講内 口縁部1/4	口	10.6		精選/良好/赤 褐	口縁部と底部との境に弱い稜を有する。口縁部は横ナデ 外面底部は手持ちヘラ削り。下でヘラナデに近い。内面 はナデ。	内外面の 一部炭素 吸着、煤 か。
第11図 PL.10	3	土師器 杯	2住 カマド 完形	口	12.9	高 6.0	粗砂粒少量/良好/ 明赤褐	口縁部は直立して立ち上がり、先端は平面面をなす。底部 との境には稜をなす。口縁部は横ナデ。外面底部は手持ち ヘラ削り。内面はナデ。	内面の全 面に 炭素吸着、 煤か。
第11図 PL.10	4	土師器 鉢	2住 1/3	口	9.0		粗砂粒/良好/明 赤褐	底部欠損。口縁部は横ナデ。体部は斜位にヘラナデ。内面 は横位にヘラナデ。	外面炭素 吸着。色 調黒色。
第11図 PL.10	5	土師器 小型甕	2住 カマド 口縁2/3欠	口	12.1	高 11.8	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/良好/赤い 褐	底部は狭小で不安定。口縁部は横ナデ。外面製部は横位に ヘラナデ。底部は粗雑なヘラナデ。内面製部は斜位のヘ ラナデ。	炭熱か。
第11図 PL.10	6	土師器 小型甕	2住 床直 胴下平～底 部	底	5.3		粗砂粒/良好/明 赤褐	外面製部はハケ目の上に縦位のヘラナデを重ねる。底部は ヘラ削り。内面は横位にヘラナデ。	外面炭素 吸着。
第11図	7	土師器 甕	2住 2内 口部縁～胴部 上位片	口	19.0		粗砂粒/良好/明 褐	口縁部は横ナデ。ハケ目を消しきれない。外面製部は縦位 にハケ目。内面は横位にヘラナデ。頸部一部ハケ目。	
第11図 PL.10	8	土師器 甕	2住 +3 胴部下位～底 部	底	6.8		粗砂粒/良好/橙	胴部外面は粘上付着のため未観察。底部外面はヘラ削り。 内面は横位のハケ目。	
第11図 PL.10	9	土師器 甕	2住 カマド 完形	口	17.5	高 29.3	粗砂粒/良好/明 褐	口縁部はハケ目の上に横ナデ。全てを消し切れてない。外面 製部は縦位のハケ目を充填。下位はこの上にヘラナデを 重ねハケ目を消している。底部はヘラ削り。ヘラナデ。内 面製部は全てハケ目を施す。	胴部に焼 成肉の黒 斑。
第12図	1	土師器 杯	3住 口縁部片	口	10.6		精選/良好/橙	小破片。口縁部は先端が平坦面をなす。また、外方に僅か に肥厚。口縁部から底部への移行部分に稜をなす。口縁部 は横ナデ。底部外面はヘラ削り。	
第12図 PL.11	2	土師器 甕	3住 口縁部片	口	15.6		粗砂粒/良好/赤 い赤褐	口縁部は横ナデ。外面は一部にハケ目。内面は先端を除い てハケ目を残す。	
第12図 PL.11	3	土師器 甕	4住 胴部下位～底 部	口	6.0		粗砂粒/良好/赤 褐	外面製部はヘラ削り。底部もヘラ削り。内面はヘラナデ。	内面は炭 素吸着。

3 井戸

1号井戸(第13図、P.L.4)

位置 調査区(東)。X軸36210・36211 Y軸-56712・-56713

重複 3号溝より前出である。

確認面形状と規模 円形。長径0.95m短径0.92mである。

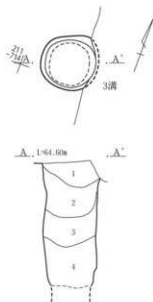
底面形状と規模 完掘できず不明である。

断面形と深さ 円筒形。2.0m以上。

埋没土 灰褐色～褐灰色砂質土を主体とする。砂の混入状況から人為埋没と思われる。

出土遺物 埋没土から土師器が1点出土したが混入と思われる。

時期 時期は特定できない。



1号井戸

- 1 灰褐色砂質土 灰色粘土小ブロック5%、炭粒1%含む。
 2 褐灰色砂質土
 3 褐灰色砂質土 灰色砂礫5%含む。
 4 褐灰色粘質土

0 1 2m

第13図 1号井戸

4 粘土採掘坑

調査区(中)で3基、調査区(東)で1基を検出した。調査区(中)の3基は、すべて1号道路面の南側を掘り込んでいる。1号道路の南側は切り土状の斜面になっていたと推測され、本遺構はその斜面を北側から掘り込んだ可能性が高い。調査区(東)の1基は2号溝埋没後の東壁上位を西側から掘り込んだ可能性が高い。掘削時には2号溝が埋まりきっておらず壁面上位が露出していたか、東側が高まる地形であったことを想像させる。

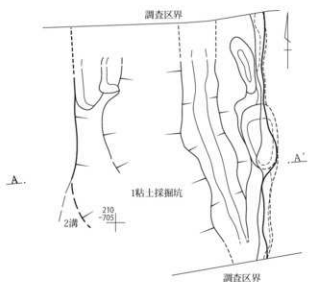
1号粘土採掘坑(第14図、P.L.4・11、第3表)

位置は調査区(東)にあり、座標X軸36209～36213、Y軸-56702～-56705。1号住居、2号溝よりも後出である。遺構確認は断面観察が多くを占め、西側の平面形状は不明である。東側は残存し上端の形状は直線的で、底面は凹凸があり、西端は溝状に南北方向に掘り込まれている。規模は長軸(390)cm短軸(316)cmで、深さは観察断面で110cmである。東側壁面はオーバーハングしており、北西端も一部が階段状に掘り込まれている。採取された粘土は、基本土層Ⅷ層(灰褐色土)が中心である。埋没土10層は、にぶい黄褐色土であり、掘削過程で堆積した可能性がある。埋没土から土師器(第14図1・2)が出土したが、重複する1号住居の比定年代と一致するため、後世に混入した遺物の可能性が高い。時期は古墳時代以降となるが、特定できない。

2号粘土採掘坑(第15図、P.L.5、第3表)

位置は調査区(中)にあり、座標X軸36204・36205、Y軸-56727・-56728。南側は調査区域外となる。1号道路よりも後出である。確認面は1号道路の底面で、基本土層Ⅷ層(灰褐色土)を掘り込んでいる。平面形は不定形である。規模は長軸116cm短軸(35)cm深さ26cmである。底面形状は凹凸がみられ、土坑状で不定形に凹んでいる。掘り込み面は上位にあるが、断面観察は行えなかった。検出面の壁は上端に向かって緩やかに立ち上がっている。埋没土は暗褐色土を主体とする。埋没土から土師器(第15図1)が出土したが、前出する1号道路の年代観から混入した遺物と考えられる。時期は中世以降となるが、特定できない。

第3章 発掘調査の記録

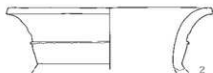
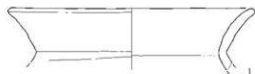


1号粘土採掘坑

- 1 暗褐色土 白色粒・炭粒1%含む。しまりなくボソボソした土。
- 2 暗褐色砂質土 白色粒1%含む。
- 3 灰褐色砂質土 褐色土小ブロック1%含む。
- 4 灰褐色砂質土 暗褐色土大ブロック10%含む。
- 5 黒褐色土ブロック+灰褐色土
- 6 灰褐色土+にぶい黄褐色土
- 7 灰褐色砂質土 暗褐色土を縞状に20%含む。
- 8 灰褐色土
- 9 灰褐色土 にぶい黄褐色土大ブロック40%含む。
- 10 にぶい黄褐色土 しまりなくボソボソした土。
- 11 灰褐色土 にぶい黄褐色土を縞状に40%含む。堅くしまる。



0 1:90 2m



0 1:3 10cm

第14図 1号粘土採掘坑と出土遺物

3・4号粘土採掘坑(第15図、P.L.5)

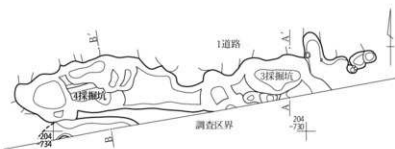
位置は調査区(中)にあり、座標X軸36203~36205、Y軸-56728~-56734。本遺構は溝状部で連続するため分離できず、一連の遺構として扱う。南側は調査区域外となる。1号道路よりも後出である。確認面は1号道路の底面で、基本土層Ⅶ層(灰褐色土)を掘り込んでいる。本遺構は不整形の土坑のまとまりとなっており、東側のまとまりを中心に3号粘土採掘坑、西側のまとまりを中心に4号粘土採掘坑とし、その間が溝状の掘り込みによってつながっている。両者を分離することは難しい。規模は全体として長軸5.78m短軸1.48mを測る。深さは3号

採掘坑が39cm、4号採掘坑が43cmである。底面形状はわずかに凹凸がみられるが比較的平坦である。観察が可能な北壁はオーバーハング気味に掘り込む部分もある。埋没土に黒褐色土が多く、基本土層Ⅶ層を主体とする。遺物は出土していない。時期は中世以降となるが、特定できない。

2号粘土採掘坑



3・4号粘土採掘坑



4号粘土採掘坑

- 1 暗褐色粘質土 黄褐色土大ブロック10%含む。
- 2 黒褐色土+褐色土小ブロック

0 1:60 2m



1 (2採坑) 0 1:3 10cm

第15図 2・3・4号粘土採掘坑と出土遺物

第3表 1・2号粘土採掘坑出土遺物

採掘区 No.	種別 No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第14図	1	土師器 甕	1採坑 口縁部片	口	19.0		粗砂粒・黒色鉱物 粒/良好/にぶい	内外面とも横ナデ。		
第14図	2	土師器 甕	1採坑 口縁部片	口	16.0		粗砂粒/良好/にぶい 赤褐色	口縁部は中位に稜をなす。内外面とも横ナデ。		
第14図 PL.11	3	石製品 不明石製品	1採坑 破片	長 幅	(13.7) (8.6)	厚 重	(8.5) 562.0	//粗粒輝石安山 岩	背面側は著しい研磨面に覆われる。左側面はノミ状工具により整形される。	内門鎌?
第15図	1	土師器 甕	2採坑 +8 口縁部片				粗砂粒/良好/にぶい	口縁部は中位に稜をなす。内外面とも横ナデ。		

5 溝

溝4条が検出された。調査区全体に及ぶ溝は1号溝だけで、残る3条はいずれも調査区(東)に位置する。1号溝は1号道路との関係が考慮される。また、1・2号溝は区画溝としての機能もうかがえる。

1・4号溝(第16～18図、P.L.5・6・11、第4表)

1号溝 位置は調査区(西)・(中)・(東)すべてに連続しており、形態から同一遺構と見なされた。調査区内での位置は中央部から南半部を占める。東西両側とも調査区域外に延びる。形成当初は1号道路より後出だが、埋没後は逆に1号道路(新段階)に壊される。ある段階では並走していた可能性が高い。調査区(東)で北側に並走する4号溝とは新旧関係不明で、同時期に存在していたことも考えられる。本遺構の東端は、Y軸-56715付近で南に折れているように見え、4号溝と合流する形態であった可能性がある。ほかに3号溝と重複するか新旧関係は不明である。規模は各調査区別に、調査区(西)が長さ4.95m幅2.39m深さ126cm、調査区(中)が長さ8.22m幅2.14m深さ103cm、調査区(東)が長さ7.14m幅1.13m深さ87cmである。各調査区を通した残存長は34.80mである。走行方位は調査区別で調査区(西)がN-90°、調査区(中西)がN-86°-E、調査区(東)がN-90°である。壁は上端に向かって斜めに立ち上がり、断面形状は西端がV字形に近いが、全体として逆台形をしている。底面形状はほぼ平坦で、断面V字形部分で丸みが見られる。全調査区を通じた両端の比高差は4cmで西から東へ下がり、勾配はほとんどない。埋没土は砂質だが流水痕跡は見られず、自然埋没と思われる。埋没土から古瀬戸陶器(第18図1)ほかが出土した。掲載遺物の他に近現代の遺物も含まれるが、近世は含まれない。埋没土から近現代の遺物は後世の混入であり、時期は出土遺物から中世を上限として、比較的陶磁器の出土量が増える近世中頃までに埋没していたと考えられる。1号道路と並走しており、一時的に側溝として機能していた可能性が高い。また、規模や形態から区画溝であった可能性もある。

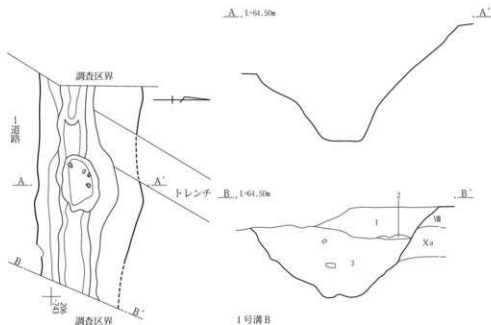
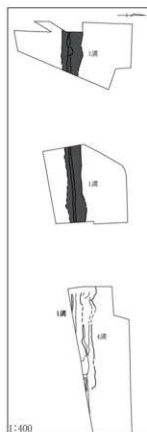
4号溝 位置は調査区(東)にあり、座標のX軸は36207～36209、Y軸は-56706～-56720である。東西両側とも調査区域外に延びる。南側に並走する1号溝とは新旧関

係不明で、同時期に存在していたことも考えられる。平面形状は直線的である。規模は長さ13.92m幅1.40m深さ52cmである。走向方位はN-90°である。壁は上端に向かって斜めに立ち上がり、断面形状はU字形に近い。底面形状はやや凹凸が見られる。中央部は東西両側より5cm程度土坑状に凹むが、南側は調査区域外となるため、状況や機能は不明である。東西両端の比高差は計測長12.20mで13cmを測り、西から東へ下がる。勾配は1.06%である。観察面で埋没状況を判断することは難しい。出土遺物は1号溝と一括であり、分別して抽出することはできない。時期は1号溝と同じ頃と思われる。西側延長部は調査区(中)で確認できず、途中で南北どちらかの方向へ折れた可能性がある。しかし、1号溝と重複したため確認できなかった可能性も残る。調査区(中)の1号溝北西部C断面で観察できる後出の溝状の掘り込みを、その延長部とする余地も残る。

備考 調査段階では1号溝と同一となっていたが、整理段階で形態から別遺構とした。

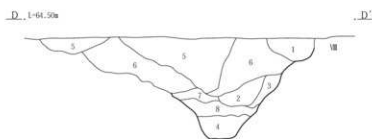
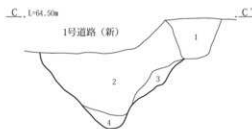
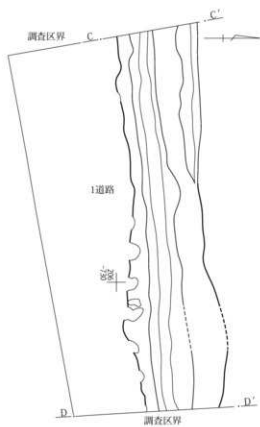
2号溝(第19図、P.L.7、第5表)

位置は調査区(東)にあり、座標X軸36209～36213、Y軸-56703～-56705。1号住居より後出で、1号粘土探掘坑より前出である。調査区内で4号溝と直接重複する部分はないが、南壁の写真から土層を観察すると、4号溝より前出するように見える。平面形状は直線的である。規模は長さ3.60m幅2.25m深さ101cmである。走行方位はN-0°である。壁は上端に向かって斜めに立ち上がり、断面形は逆台形をしている。底面形状は全体として平坦に近いが、一部に凹んで丸くなる部分が見られる。南北端の比高差は計測長2.97mで6cmを測り、勾配2.02%で南から北へ下がる。埋没土は砂質だが流水痕跡は見られず、観察面で埋没状況を判断することは難しい。出土遺物は埋没土から土師器壺(第19図1)などが出土したが、周辺住居の比定年代に近いので、混入と考えられる。時期は古墳時代を上限とする。規模や形態から区画溝であった可能性もある。



1号溝B

- 1 灰褐色土 白色粒1%含む。やや砂質。
- 2 にぶい黄褐色土
- 3 灰褐色砂質土 褐色土小ブロック5%含む。



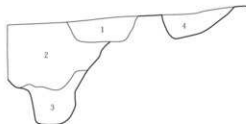
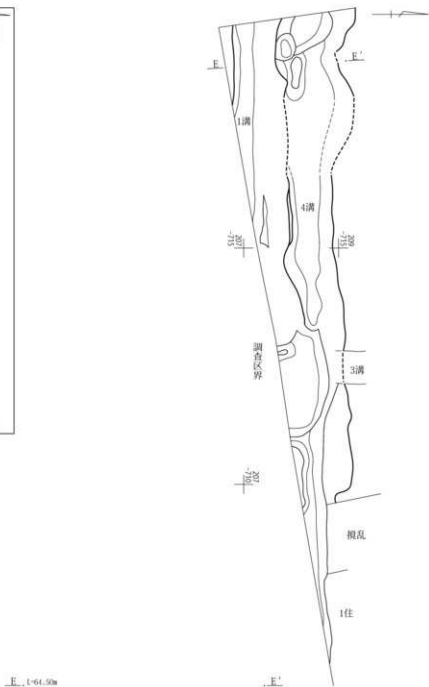
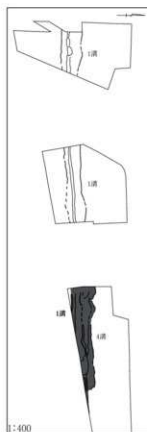
1号溝C・D

- 1 灰褐色土 白色粒1%含む。やや砂質。
- 2 灰褐色土 褐色土大ブロック5%、白色粒1%含む。
- 3 灰褐色土
- 4 にぶい黄褐色土
- 5 黒褐色土 灰褐色土を含んで色調明るい。白色粒1%含む。やや砂質。
- 6 黒褐色土 白色粒1%含む。やや砂質。
- 7 黒褐色土 褐色土小ブロック10%含む。やや砂質。
- 8 黒褐色土 褐色土小ブロック20%含む。

断面 1:40 1m

0 1:80 2m

第16図 1号溝(1)



1号溝 E

- 1 黒褐色砂質土 白色粒・炭粒 1%含む。
- 2 黒褐色砂質土 黄褐色粒 1%含む。
- 3 灰褐色砂質土 黄褐色粒 1%含む。

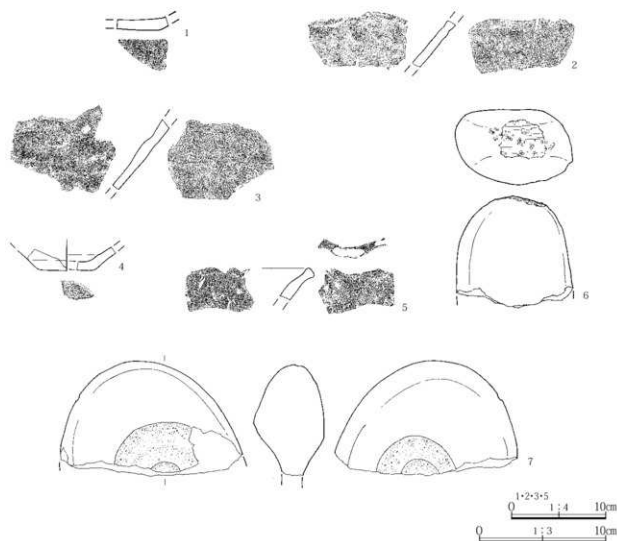
4号溝

- 4 暗褐色土 白色粒 1%含む。

第17図 1号溝(2)・4号溝

0 断面 1:40 1m

0 1:80 2m



第18図 1号溝出土遺物

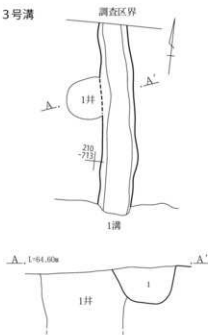
第4表 1号溝出土遺物

採 取 PL.No.	No.	種 類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第18図 PL.11	1	古瀬戸陶器 大皿?	底部片				//灰白	外面無軸。底部内面灰軸刷毛塗り。	中世。	
第18図	2	常滑陶器 曇か盆	体部片				//橙	内外面撫で。内面接合痕残る。	中世。	
第18図	3	常滑陶器 曇	体部片				//灰	内外面撫で。内面指頭圧痕。	中世。	
第18図	4	在地系土器 皿	底部片	底	(4.4)		//橙	体部外反。底部回転糸切無調整。	中世か。	
第18図 PL.11	5	在地系土器 片口鉢	片口部片				//灰	陶器質にやや焼き締まる。片口部のため口径不明。	中世。	
第18図 PL.11	6	礫石器 敲石	上半部破片	長 幅	(8.8) 9.2	厚 重	5.9 665.9	//粗粒輝石安山 岩	上端部小口部に著しい敲打痕が残る。視熱して裏面側は破ける。	横門礫?
第18図 PL.11	7	石製品 不明石製品	1/3	長 幅	(9.0) (14.3)	厚 重	5.5 696.3	//粗粒輝石安山 岩	背面側に推定径8cm(深さ2.2cm)・裏面側に推定径3cm(深さ1.7cm)の孔を穿つ。それぞれの孔内面は良く摩耗。	横門礫

3号溝(第19図、P.L.7)

位置は調査区(東)にあり、座標X軸36712~36715、Y軸-56712・-56713。北側は調査区域外へ延びる。重複関係は1号井戸より後出で、1号溝との新旧関係は不明である。平面形状はわずかに西方へ向かって湾曲する。規模は長さ4.08m幅0.76m深さ41cmである。走行方位はN-8°-Wである。壁は上端に向かって垂直ぎみに立ち上がり、断面形状は箱形に近い。底面はほぼ平坦である。南北両端の比高差は6cmで、勾配1.5%で南から北へ下向する。埋没土は砂質だが流水痕跡は見られず、観察面で埋没状況を判断することは難しい。出土遺物は埋没土から土師器6点(非掲載遺物)が出土したが混入とも考えられる。時期を特定することはできない。

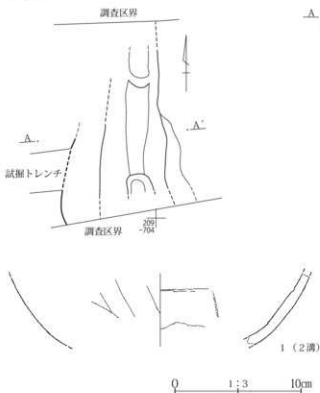
3号溝



3号溝

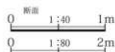
1 暗褐色砂質土 黄褐色土小ブロック5%含む。

2号溝



2号溝

1 褐灰色砂質土 黄褐色粒1%含む。酸化凝集あり。
2 灰褐色砂質土 黄褐色粒1%含む。酸化凝集あり。



第19図 2・3号溝と出土遺物

第5表 2号溝出土遺物

掘 区	No.	種 類	出土位置	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第19区	1	土師器 遺	割断片		粗砂粒/良好/ぶ い橙	外面は斜縦位に、内面は横位にヘラナデ。	やや厚風。

6 道路

1号道路(第20～22図、P.L.5～9・11、第6・7表)

位置は調査区(西)・(中)で連続しており、形態から同一遺構と見なされた。調査区(西)：座標X軸36203～36205、Y軸-56743～-56747、調査区(中)：座標X軸36204～36206、Y軸-56727～-56735。路面の評価は断面観察の結果であり、平面的に調査・図化できていない。平面図は下位の最終面であり、波板状遺構を完掘した状態を示している。道路の規模は、波板状遺構の規模から類推するしかない。波板状遺構を検出した範囲は、調査区別に調査区(西)で長さ4.02m幅約2m、調査区(中)で長さ7.92m幅約2mである。調査区間を含めた総延長は約21mである。走向方位は誤差もあるが、およそN-87°-Eである。路面自体の傾斜は緩いが、調査区(西)と同(中)の高低差をC・K断面と比較すると、前者の方が凹凸面の検出標高は14cm程度高く、後者の場合、K断面だけで東へ向かって5～10cm程度下降している。このK断面で、検出面が比較的安定している地点間で確認面の勾配を計ったところ、直線距離6.2mで5cm東へ下降し、勾配0.8%であった。調査区(西)は1号溝との重複も少なく、南側は粘土探掘坑もないため、比較的道路の状況がうかがえる。南側には地山が斜めに立ち上がっており、切り土整形がなされている。形態から道路に伴う地業と考えられ、南側が土手状に高い地形であったか、切り通し状であったと推測する。調査区(中)の南壁付近で、粘土探掘が著しくなされている背景には、南側が高くなっている状況があったためと考えられる。

路面は繰り返し形成されており、最終段階は近現代まで継続する。A・B断面では最下位の路面が1号溝を壊しており、上位で確認できる路面3面はそれ以降となる。E断面では最上位の路面が1号溝埋没土を壊し、下位で確認できる路面3面は逆に1号溝に壊されている。したがって、路面は最大で7面程度確認され、構築当初は後出の1号溝によって一部を壊されるが、同溝が埋没したのち、走向を一部北側へ変更しながら、溝の埋没土を路面としていたことが判明する。路面の埋没土は堅くしまるが、盛土などによって整備された状況は見られない。

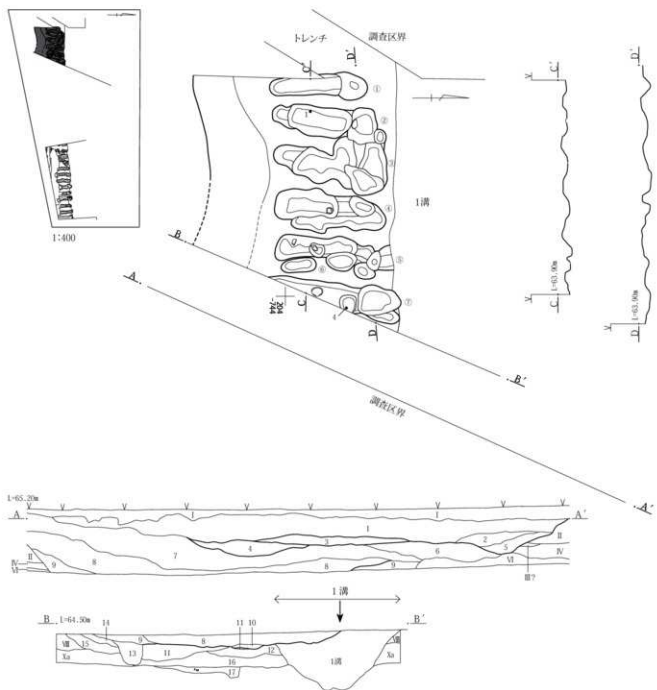
平面形状は細長い楕円形で、北端は円形の土坑状に凹む。南端は調査区(西)の場合、平坦のままか逆に高くな

るものが見られる。調査区長の長い調査区(中)は、粘土探掘坑によって壊され検出状態は悪いが、残存部分で南側が凹むものは非常に少ない。波板状遺構凹凸面の計測値は、第7表に示したとおりである。およその傾向として、凹凸面の長さは180cm前後と思われるが、No.⑦は残存長で214cmあり、検討の余地が残る。最大幅は調査区(西)の場合、形状の乱れもあり、軸部で30～52cm(一部残存は除く)と数値が分散する。調査区(中)の場合、比較的形状は整っており軸部が21～39cmで、北側端部凹みが24～47cmで、軸部より広がる傾向がうかがえる。凹凸面軸部底面の標高は、調査区(西)C断面ではほぼ変わらず、調査区(中)K断面では西端から東端へ向かって10～15cm程度下降していた。ただし、中央部が最も下がっており、凹み部分に含まれる可能性がある。凹凸面の縦断面形状は柄杓形に近くなっている。横断面の形態は、軸部がU字形か逆台形で、北端の凹みは逆三角形で頂部が西側に偏るものがやや多い。波板状遺構の埋没土も路面の埋没土と違いは見られない。波板状遺構底面で古瀬戸陶器鉢皿(第22図2)、最下面直上近くで在地系土器片口鉢(同3)が出土し(ともに14・15世紀代か)、上層で龍泉窯系青磁碗(同1)、聖宋元寶(同4：初铸1101年)が出土した。本遺跡全体における中世遺物の出土は、1号溝出土遺物を除けば非常に少ない。1号溝は、本遺構より後出して一時期並走するが、埋没土に近世遺物を含んでいない。このため、道路の構築時期と出土遺物の年代は、ほぼ一致すると考えられ、14・15世紀頃と考えられる。

7 復旧坑

1号復旧坑群(第23図、P.L.9、第8表)

位置は調査区(東)にあり、座標X軸36210～36213、Y軸-56692～-56699。南側は調査区域外へ延びる。2号住居より後出で、北側は攪乱により若干壊される。本遺構は13条の掘り込みで構成される。確認された範囲は、東西7.14m、南北1.94mで、各掘り込みの規模や走向方位は第9表のとおりである。壁は上端に向かってほぼ垂直に立ち上がる。底面形状はやや凹凸が見られる。埋没土6層は大円礫と黒褐色土の混土であり、洪水堆積物を主体とすると考えられる。上位3層は暗褐色土で耕作土とは見なしにくい。耕作地の復旧とは見なし難い。埋没土から在地系土器焙烙(第23図2)が出土遺物するほ



1号道路 A・B

1 暗褐色土+垂角礫 堅くしまる。上面は近現代道路面。

2 石灰ガタ

3 暗褐色土 白色粒5%含む。やや砂質。堅くしまる。上面は近現代道路面。

4 灰褐色土 小礫20%、白色粒5%含む。堅くしまる。下面は道路側溝か。

5 灰褐色土 白色粒5%含む。やや砂質。堅くしまる。下面は道路側溝か。

6 灰褐色土 小礫5%、白色粒5%含む。やや砂質

7 暗褐色砂質土 白色粒1%含む。

8 暗褐色砂質土 褐色粒・白色粒・炭粒1%含む。

9 暗褐色土 白色粒1%含む。やや砂質。

10 灰褐色砂質土 白色粒1%含む。堅くしまる。

11 ぶい褐色~暗褐色土 互層堆積で層境は波状に乱れる。堅くしまる。上面は道路面。

12 灰褐色土 白色粒1%含む。

13 暗褐色土 黄褐色土大ブロック5%含む。やや粘性あり。

14 灰褐色土 やや粘質。

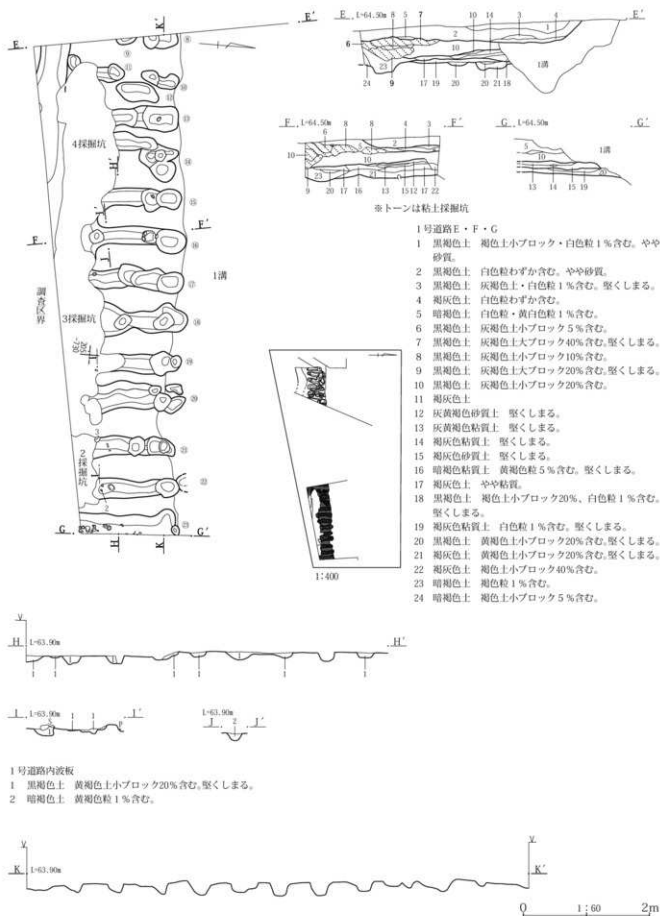
15 暗褐色土 やや粘質。

16 黒褐色砂質土 浅間B軽石含むか。堅くしまる。

17 褐灰色砂質土 鉄分凝集あり。

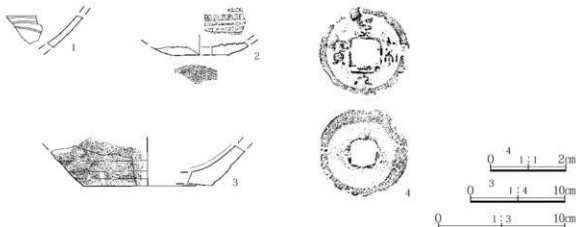
0 1:60 2m

第20図 1号道路(1)



第21図 1号道路(2)

第3章 発掘調査の記録



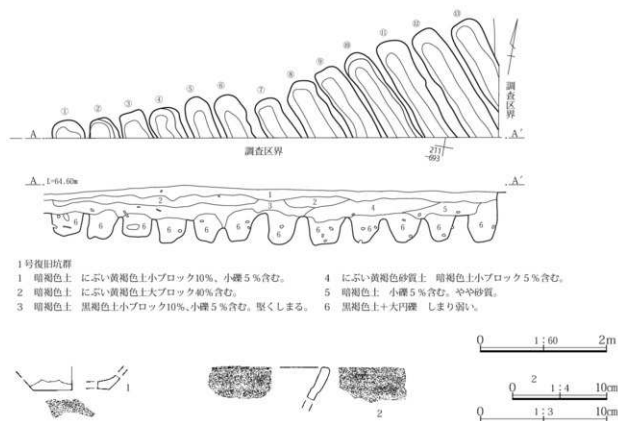
第22図 1号道路出土遺物

第6表 1号道路出土遺物

挿入No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第22図 PL.11	1	龍泉原系 内磁碗	波板内 +11 体部片			//灰白	太宰府分類1-2類か、内面へう彫りによる施文、外面無文、内外面青磁釉。	12世紀中頃 ～後半か。
第22図 PL.11	2	古瀬戸陶器 御皿	波板内 底直 底部片	底	(4.7)	//灰白	底部外面回転系切無調整。内面御目。残存部無釉。	中世。
第22図 PL.11	3	在地系土器 片口鉢	波板内 +2 底部片	底	(13.7)	//灰白	底部外面回転系切無調整。内面使用により平滑。残存部に すり目なし。	中世。
第22図 PL.11	4	銅製品 銭貨	波板内 +20 ほぼ完形	径 2.4 径 2.4	厚 0.12 重 2.87		聖宋元宝、外縁・文字・郭とも明瞭だが外縁・文字・郭の 一部に劣化後使用による欠損有り、裏面はやや平坦で外縁 は明瞭だが郭は不明瞭。聖の文字から縁のにかけて磨削り 有り。	

第7表 1号道路 波板状遺構凹凸面計測表

番号	長さ (cm)	軸部 最大 幅 (cm)	端部 最大 幅 (cm)	軸部 最大 深 (cm)	端部 最大 深 (cm)	長軸方位	次の凹みとの 間隔 (cm)	調査区 (西)								
								番号	長さ (cm)	軸部 最大 幅 (cm)	端部 最大 幅 (cm)	軸部 最大 深 (cm)	端部 最大 深 (cm)	長軸方位	次の凹みとの 間隔 (cm)	
①	155	32	41	8	10	N-0°	14~20	⑧	55	(22)		13			N-6°-W	⑩へ45
②	168	46	57	10	11	N-8°-E	17~26	⑨	(31)	(14)		7			-	⑪へ33
③	181	52	83	8	12	N-9°-E	14~21	⑩	60	25		11			N-10°-E	⑬へ27
④	173	30	43	8	12	N-4°-E	15~23	⑪	(93)	21	24	5	7		-	⑬へ45
⑤	(185)	30	53	10	9	N-5°-E	3	⑫	65	30		12			N-0°	8~13
⑥	56	22		10		N-5°-W	6~10	⑬	(104)	35	40	4	15		N-0°	12~16
⑦	(214)	40	54	6	9	N-7°-E		⑭	(108)	27	47	10	15		-	60
								⑮	(125)	27	32	9	12		N-2°-W	31~36
								⑯	(165)	29	38	12	17		N-1°-W	32~42
								⑰	(150)	30	34	10	20		N-0°	30~42
								⑱	(137)	27	46	8	15		N-2°-W	30~35
								⑲	(89)	30	37	8	22		N-1°-W	16
								⑳	(153)	39	29	8	16		N-5°-W	40~48
								㉑	(126)	27	26	9	12		N-4°-W	35~43
								㉒	(143)	25	30	9	11		N-4°-W	23~32
								㉓	(161)	(32)			9	11	N-2°-W	



第23図 1号復旧坑群と出土遺物

第8表 1号復旧坑群出土遺物

採掘No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				底	(6.0)				
第23図	1	在地系土器 皿	底部片				//橙	底部外面回転系切無調整。	江戸時代か。
第23図	2	在地系土器 焙烙	口縁部片				//黒	断面黒色、器表付近灰白色、器表黒色。	江戸時代。

第9表 1号復旧坑群計測表

番号	長さ (cm)	最大幅 (cm)	最大深 (cm)	長軸方位
①	(34)	50	36	—
②	(32)	46	40	—
③	(46)	44	39	N-24°-W
④	(57)	49	37	N-30°-W
⑤	(73)	40	37	N-28°-W
⑥	(80)	43	33	N-32°-W
⑦	(80)	44	43	N-36°-W
⑧	(115)	53	44	N-38°-W
⑨	(138)	42	34	N-39°-W
⑩	(170)	47	34	N-41°-W

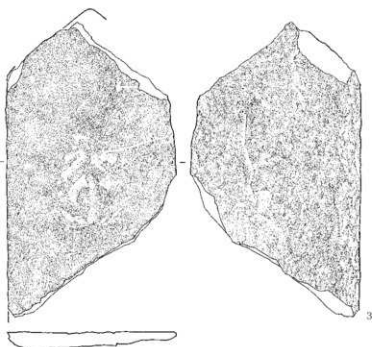
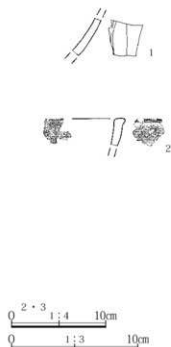
番号	長さ (cm)	最大幅 (cm)	最大深 (cm)	長軸方位
⑪	(190)	47	38	N-41°-W
⑫	(205)	50	43	N-40°-W
⑬	(152)	50	39	N-39°-W

第3章 発掘調査の記録

か、江戸時代の遺物が14点出土した。しかし、ガラスを含めて近現代の出土遺物も112点出土したことから、本遺構の年代は近現代と考えるのが妥当であろう。位置関係から考えて、昭和22年(1947)のカスリーン台風による粕川の氾濫に伴う汚泥の処理遺構と考えられる。

8 遺構外出土遺物(第24図、P L.11、第10表)

掲載遺物3点のほか、非掲載遺物141点(第11表)がある。近世遺物が113点で多くを占める。第24図3の板碑は表土から出土したもので、出土状態の記録・所見はない。



第24図 遺構外出土遺物

第10表 遺構外出土遺物

種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第24図 PL.11	1	龍泉窯系 青磁碗	一括 体部片				//灰白	鎮蓮弁文碗。太宰府分類II-b・c類。	13世紀前 後～前半。	
第24図	2	在地系土器 内耳鍋か	一括 口縁部片				//橙	口縁端部外面外方に突き出る。口縁端部上面やや窪む。	15～16世 紀か。	
第24図 PL.11	3	石造物 板碑	表土 上半部破片	長 幅	(31.3) (17.8)	厚 重	2.0 1563.6	//緑色片岩	浅い葉研削りの主尊キリクと連坐が残る。二条線なし。碑面は平滑。裏面に幅15mm程の平ノミ状工具痕が残る。	

第11表 非掲載出土遺物集計表

遺構番号	遺構種	古代410点										中世2点													
		土師器					須恵器					中国磁器			中国陶器			国産施釉陶器		国産焼締陶器		在地系鉢・甗	在地系皿	在地系器種不詳	瓦
		小型製品	中型製品	大型製品	不明	小型製品	中型製品	大型製品	不明	椀・皿	瓶類	不明	瓦	中国磁器	中国陶器	国産施釉陶器	国産焼締陶器	在地系鉢・甗	在地系皿	在地系器種不詳	瓦				
1	住居			28																					
2	住居	13		79																					
3	住居	4		23																					
4	住居	1	1	16																					
1	溝	7		43													2								
2	溝	2		3																					
3	溝	1		5																					
1	井戸			1																					
1	道路	2		34																					
1	探掘坑	7	3	86																					
2	探掘坑			9																					
1	復旧坑	5		11																					
調査区一括	11			15																					
計		53	4	353	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0				
遺構番号	遺構種	近世20点								近現代160点						時期不詳0点									
		中国磁器	中国陶器	国産磁器	国産施釉陶器	国産焼締陶器	在地系焙烙・甗	在地系皿	在地系その他	瓦	陶磁器	土器類	瓦	十能瓦	ガラス	その他	土器類	瓦	その他						
1	住居																								
2	住居				1					1	1														
3	住居				1					1	4														
4	住居				1																				
1	溝									3	2														
2	溝																								
3	溝																								
1	井戸																								
1	道路																								
1	探掘坑																								
2	探掘坑																								
1	復旧坑			10	4					22	12			2											
調査区一括	11			2	1					70	35	2	1	4											
計		0	0	12	8	0	0	0	0	97	52	4	1	6	0	0	0	0	0	0	0				

総点数
592点

第4章 分析

第1節 分析の目的

1 はじめに

宗高南遺跡の立地条件や地形形成を理解するため、テフラ分析や土層観察を株式会社火山灰考古学研究所に委託して実施した。

2 目的

宗高南遺跡は粕川の右岸で、伊勢崎台地の東縁辺に位置する。伊勢崎市本関町以南の粕川流域には、洪水堆積物が厚く堆積することが明らかにされつつある。しかし、その実態が解明されたとはいえない状況にある。遺跡周辺域の地形形成を正しく捉えることが遺跡の理解に必要なため、テフラ分析を実施した。

第2節 自然科学分析の結果

1 はじめに

関東地方北西部に位置する伊勢崎市とその周辺には、赤城火山、榛名火山、浅間火山などをはじめとする北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており、遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

宗高南遺跡の発掘調査でも、層位や年代が不明な土層が認められたことから、地質調査を実施して土層やテフラの記載を行うとともに、採取した試料を対象にテフラ検出分析を行って、すでに噴出年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を実施して、それとの層位関係から土層の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象は、調査区(東)3号旧石器トレンチ北地点、調査区(東)3号旧石器トレンチ北壁、調査

区(中)西壁の3地点である。

2 土層の層序

(1)調査区(東)3号旧石器トレンチ北地点

調査区(東)3号旧石器トレンチ北地点では、遺構確認面より上位の本遺跡の土層の上半部をよく観察できた。ここでは、下位より黒灰色土(層厚8cm)、黄灰色細粒軽石をや黄白色粗粒火山灰を多く含む暗灰褐色土(層厚3cm、軽石の最大径2mm)、黄白色や白色の細粒軽石や粗粒火山灰を比較的多く含むわずかに灰色がかかった褐色土(層厚8cm)、白色の細粒軽石や粗粒火山灰を含む灰褐色土(軽石の最大径2mm)、わずかに黄色がかかった黄色土(層厚7cm)、灰色粗粒火山灰砂混じり灰褐色土(層厚26cm)が認められる。

その上位は盛土で、下位より暗褐色土ブロックを含む灰色砂層ブロック層(層厚8cm)、暗褐色土ブロック混じり灰褐色土(層厚6cm)、垂円→垂角礫混じり灰褐色土(層厚7cm)、黄色砂層(層厚4cm)、灰褐色土(層厚4cm)からなる。

(2)調査区(東)3号旧石器トレンチ北壁

調査区(東)3号旧石器トレンチ北壁では、遺構確認面より下位の本遺跡の土層の下半部をよく観察できた(第25図)。ここでは、下位より垂円礫混じりで若干青みを帯びた灰色砂層(層厚8cm以上、礫の最大径43mm)、垂円礫混じり灰色砂質シルト層(層厚12cm、礫の最大径64mm)、わずかに桃色がかかった灰色シルト層(層厚17cm)、灰色粗粒火山灰混じり暗灰色土(層厚7cm)、灰色粗粒火山灰を多く含む黒灰色土(層厚7cm)、暗灰色土(層厚9cm)、明るい灰色シルト質砂層(層厚28cm)、灰色砂質土(層厚10cm)、黄色砂混じり暗灰色土(層厚19cm)、黄灰色砂層ブロックに富む灰褐色土(層厚17cm)が認められる。

(3)調査区(中)西壁

調査区(中)西壁では、調査区(東)3号旧石器トレンチ北地点と比較してより良い状態でテフラ粒子などを認めることができた(第25図)。ここでは、下位より黒灰褐色

土(層厚16cm以上)、灰色細粒軽石を多く含む黒灰褐色土(層厚6cm、基底部に土器片)、鉄分をやや多く含む暗褐色土(層厚4cm)、白色細粒軽石を含む灰褐色土(層厚6cm)、黄色砂質シルト層(レンズ状、最大層厚4cm)、褐色がかった灰色土(層厚4cm)、灰褐色土(層厚7cm)、灰色粗粒火山灰を多く含む灰褐色土(層厚23cm)、盛土(層厚26cm)が認められる。

3 テフラ検出分析

(1)分析試料と分析方法

調査区(東)3号旧石器トレンチ北地点、調査区(東)3号旧石器トレンチ北壁、調査区(中)西壁の3地点において、基本的に5cmごとに設定された試料のうち、14点を対象にテフラ粒子の量や特徴を相対的に明らかにするテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次の通りである。

- 1)試料6gを秤量。
- 2)超音波洗浄装置を用いながらいぬいに泥分を除去。
- 3)80℃で恒温乾燥。
- 4)実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や色調などを観察。

(2)分析結果

テフラ検出分析の結果を第12表に示す。調査区(東)3号旧石器トレンチ北地点では、軽石やスコリアは検出されなかったものの、いずれからも火山ガラスが検出された。その中では、試料12iにスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラス、試料10iにさほど発泡の良くない白色軽石型ガラスや、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラス、試料4に比較的良く発泡した淡褐色や光沢のある褐色の火山ガラスが比較的多く認められる。これらのうち、灰白色、淡褐色、褐色の軽石型ガラスには斜方輝石や単斜輝石、また白色の軽石型ガラスには角閃石や斜方輝石が斑晶鉱物として認められる。

調査区(中)3号旧石器トレンチ北壁では、試料24iにわずかに灰色がかった白色のスポンジ状軽石型ガラスが少量含まれている。この試料と、その上位の試料16では、斜長石や自形の斜方輝石および単斜輝石が多く含まれる傾向にある。また、試料6や試料4には、灰白色や白色のごく細粒のスポンジ状軽石型ガラスが少量認められる。

調査区(中)西壁では、いずれの試料からも軽石や火山

ガラスを検出できた。試料7にはスポンジ状に良く発泡した灰白色の軽石(最大径3.8mm)やその細粒物である軽石型ガラス、試料10にはそのほかに発泡の良くない白色軽石型ガラスが比較的多く含まれている。また、試料1では、比較的良く発泡した淡褐色の軽石(最大径4.1mm)や、その細粒物である淡褐色の軽石型ガラス、さらに光沢のある褐色の軽石型火山ガラスが多く多く認められる。これらのうち、灰白色、淡褐色、褐色の軽石や軽石型ガラスには斜方輝石や単斜輝石、また白色の軽石型ガラスには角閃石や斜方輝石が斑晶鉱物として認められる。

4 考察—指標テフラとの同定と

その層位について

テフラの保存状態が良い調査区(中)西壁で検出された灰白色の軽石や軽石型火山ガラスは、その岩相や斑晶鉱物の組み合わせなどから、3世紀後半に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石(As-C、荒牧、1968、新井、1979、坂口、2010)に由来すると考えられる。

また、その上位の白色の軽石型火山ガラスは、その層位や岩相さらに斑晶鉱物の組み合わせなどから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳活川テフラ(Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992、2003)に由来する可能性が高い。

さらに上位の試料から検出された淡褐色の軽石や軽石型火山ガラス、それに光沢をもつ褐色の軽石型火山ガラスは、層位や岩相さらに斑晶鉱物の組み合わせなどから、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間Bテフラ(As-B、荒牧、1968、新井、1979)に由来すると考えられる。これらのことから、Hr-FAとAs-Bの間に層位がある黄色シルト質砂層については、層位や層相、さらに上流域での検出状況などから、弘仁9(818)年地震に関連した洪水堆積物(能登ほか、1990)の可能性が指摘される。また、調査区(中)西壁で検出された土器片の層位は、As-C包含層の基底付近であると推定される。したがって、同じ特徴をもつテフラ粒子が検出された調査区(東)3号旧石器トレンチ北地点においても、下位よりAs-C、Hr-FA、As-Bの降灰層準があることになる。

より下位の土層が認められた調査区(東)3号旧石器トレンチ北壁では、層相を合わせると、試料18付近に斜長

第4章 分析

石、斜方輝石、単斜輝石、さらに桃色の岩片で特徴づけられるテフラの降灰層準のある可能性が指摘できる。このテフラについては、約8,200年前¹⁾に浅間火山から噴出した浅間藤岡テフラ(As-Fo, 早田, 1996など)や、約1.1万年前²⁾に浅間火山から噴出した浅間総社軽石(As-Sj, 早田, 1990, 1996など)の可能性もある。ただし、本試料中に軽石や軽石型火山ガラスが検出されず、下位の試料24でわずかに灰色がかかった軽石型ガラスが検出されたこと、またほかの粒子の傾向が試料24と類似していることから、試料18付近にAs-Sjの降灰層準のある可能性はさほど高くないように思われる。今後、火山ガラスや斜方輝石の屈折率測定を実施して、テフラの同定精度を向上させると良い。

5 まとめ

宗高南遺跡において、地質調査とテフラ検出分析を実施した。その結果、浅間C軽石(As-C, 3世紀後半)、榛名二ツ岳澁川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)を検出できた。また、そのほかに縄文時代早期の浅間藤岡軽石(As-Fo, 約8,200年前³⁾)に由来する可能性のあるテフラ粒子の濃集部を検出できた。さらに、本遺跡ではHr-FAとAs-Bの間に、弘仁9(818)年の地震に関係した洪水堆積物の可能性が高い堆積物があることも明らかになった。

第12表 テフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア		火山ガラス		備考	
		量	色調	量	形態 色調		
調査区(東) 3号旧石器北地点	4			**	pm 淡褐	褐色火山ガラスに光沢。	
	8			*	pm 白		
	10			**	pm 白, 灰白		
	12			**	pm 灰白		
	14			*	pm 白		
調査区(東) 3号旧石器トレンチ北壁	4			*	pm 灰白, 白		
	6			*	pm 灰白, 白		
	8			(*)	pm 透明		
	16						
	24			*	pm 灰白	p1, 自形のopxおよびcpxが多い, 桃色岩片少量。	
調査区(中) 西壁	1	*	淡褐	4.1	***	pm 淡褐, 褐	褐色火山ガラスに光沢。
	5	*	灰白	3.0	**	pm 白, 灰白	
	7	**	灰白	3.8	***	pm 灰白	

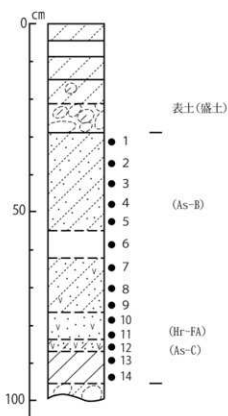
****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない, (*): とくに少ない。
最大径の単位は, mm, bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型。
pl: 斜長石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石。

*1~3: 放射性炭素(¹⁴C)年代

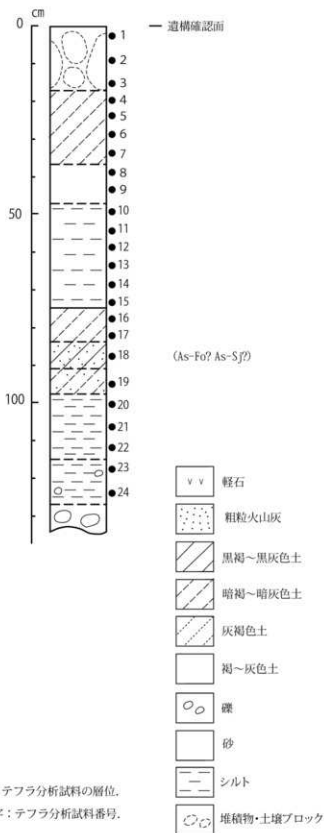
文献

- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52。
 筑波重雄(1968)浅間火山の地質。地質研報, no.14, p.1-45。
 町田 洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス-日本列島とその周辺」, 東京大学出版会, 276p。
 町田 洋・新井房夫(2003)「新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺」, 東京大学出版会, 336p。
 能登 健・内田憲治・早田 勉(1990)赤城山南麓の歴史地震-弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析-。信濃, 42, p.455-772。
 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源A・F層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119。
 坂口 一(2010)高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向-中居町一丁目遺跡R22の水田耕作地と周辺集落との関係-。群馬県埋蔵文化財調査事業研報「中居町一丁目遺跡3」, p.17-22。
 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312。
 早田 勉(1990)群馬県の自然と風土。群馬県史編さん委員会編「群馬県史通史編1 原始古代1」, p.37-129。
 早田 勉(1996)関東地方-東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御宿第1テフラより上位のテフラについて。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, №, p.256-267。

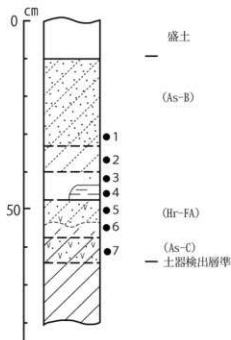
調査区(東)3号旧石器トレンチ北地点(上層)



調査区(東)3号旧石器トレンチ北壁(下層)



調査区(中)西壁



第25図 分析地点の土層柱状図

第5章 総括

第1節 まとめ

本遺跡では古墳時代の住居4軒と、中世以降の道路1条、溝1条、粘土採掘坑4基、復旧坑群1か所、時期不明の井戸1基、溝3条が調査された。ここでは、古墳時代と中世以降についてまとめる。

古墳時代 住居4軒はすべて6世紀前半に比定されたが、3・4号住居は部分的な調査であり、出土遺物も少なく形態も不明となった。1・2号住居も半分近くが、重複により失われていた。カマドは2号住居でのみ検出され、北カマドであった。2号住居は1辺約5mであり、6世紀前半としては中形規模である。

住居は、調査区(東)の東側に4軒が集中する。東方約10mには粕川が南流しており、集落はその縁辺に広がっていたと推測できる。

中世 1号道路と1号溝が検出された。前者については次項で検討する。1号溝は1号道路に後出し、比較的大規模な溝であった。道路側溝の位置にあり、一時的には並走していたと推測される。側溝としては規模が大きく、別の機能が付加されていた可能性が高い。東端は南へ折れ始めているように見える。形状から区画溝であった可能性もうかがえる。立地として、粕川渡河点の西詰め位置しており、西方の赤石城域と東方の赤城神社周辺を結ぶ交通上の要所であったと考えられる。

中近世以降 粘土採掘坑がやや多く検出された。1号道路の南斜面や2号溝東側の露頭など、粘土を採取しやすい状況が影響したとみられる。採取量としては個人規模を超えるものではなく、壁土などへの使用が想定される。生活痕跡と位置づけられよう。復旧坑群は近現代に位置づけられる。状況から昭和22年(1947)のカスリーン台風による粕川の洪水が想定され、復旧作業の実態を示す民俗事例としても貴重な成果となった。

第2節 中世に構築された道路について

1 道路の概要

本遺跡調査区(西)・(中)では、道路が確認され最下面で波板状遺構を検出した。道路面は平面的に調査・図化することができず、断面観察のみとなったが、波板状遺構を最下面で検出し図化を行った。道路の調査延長は約21mで、幅員は約2mと推測される。出土遺物は、波板状遺構底面で古瀬戸陶器(第22図2)、最下面直上近くで在地系土器片口鉢(同3)が出土し(ともに14・15世紀)、上層で龍泉窯系青磁碗(同1:12世紀後半～13世紀前半)、聖宋元寶(同4)が出土した。本遺跡全体における中世遺物の出土は、1号溝出土遺物を除けば非常に少ない。1号溝は一時期道路に並走すると見られることや、埋没土に近世遺物を含んでいないことから、道路の構築時期と出土遺物の年代は、ほぼ一致すると考えられる。

本遺構の東方約10mには粕川が流れ、現在も天増寺橋が架けられている。この橋は「橋供養地蔵尊」によって、宝暦12年(1762)に存在していたことが確認できる。対岸近くには、湖名荘惣領寺「殖木宮」赤城神社や中世糟川寺の跡地とされる天増寺が建立されており、天増寺橋も中世まで遡る可能性が高い。本遺構は東方で橋と接続して粕川を渡河していたと考えられる。また、西方延長線上には、那波氏が一時期居城とした赤石城と、その後築城された伊勢崎城が存在する。本遺構は、その赤石城下へ向かう道路であったと推定される。

2 周辺での調査状況

本遺跡周辺では道路について比較的多くの調査事例がある。その幾つかについて、取り上げ検討の参考とする。

南久保遺跡 本遺跡の北方約1.3kmに位置する(第7図9)。伊勢崎市鹿島町に所在する。粕川左岸の後背湿地に立地する。本遺跡の事例は古代の道路であり、佐位郎衛正倉に位置づけられる三軒屋遺跡(第7図7)との関連

が想定されている。道路の調査総延長は約90mで、路面幅は4.2～4.3mである。両側に側溝を伴い、側溝の芯々間約6mである。走向方位はN-88°-Wである。盛土による路面整備が認められる。波板状遺構は確認されていない。

大道西遺跡 本遺跡の北東約1.5kmに位置する(第7図8)。伊勢崎市豊城町に所在する。男井戸川下流域に形成された谷地内に位置する。本遺跡の事例は古代の道路であり、昭和初期には路線バスが通るなど近現代まで断続的に使用されている。佐位部衝正倉に位置づけられる三軒屋遺跡との関連が想定されている。道路の調査総延長は約85mで、幅員は7.2m以上と推測されている。走向方位はN-78°-Eである。路面は盛土で構築され、谷を渡る部分に版築工法が施される。基底部幅は9.8m以上と推測されている。波板状遺構は確認されていない。

田部井大根谷戸遺跡 本遺跡の北東約5kmに位置する。伊勢崎市田部井町に所在する。大間々扇状地扇中央部に形成された「大根谷戸」という低地に立地する。中世から近世の道路であり、中世の幹線道「あづま道」に比定されている。道路の調査総延長は23.9mで、幅員は3.2mで、両側に側溝を伴う。走向方位はN-84°-Eである。路面硬化面は6面確認されたが、盛土による明確な路面整備は報告されていない。硬化面に不規則な浅い凹凸が見られるとするが、波板状遺構とは認識されていない。

以上の調査事例は、官道あるいは広域に及ぶ幹線道の調査であり、本遺跡とは性格も規模も異なっている。いずれも低地に立地するが、波板状遺構は確認されていない。

3 波板状遺構の検討

(1)分類の現状

道路の考古学的な調査研究は、古代道路を中心に進められてきた。しかし、道路の形態や構築方法は、古代以前から連続と続いており、中世もその延長上にある。よって、近年の古代道路研究を拠り所として検討を進める。

波板状遺構は、波板状凹凸とも言われ、近江俊秀氏によれば、「道路遺構に伴ってしばしば検出される、円形ないし楕円形のくぼみが一定間隔で並ぶもの」とされている(近江2006)。本遺跡の波板状遺構の性格を考える

ため、以下近江氏の分類と分析を確認した上で、本遺跡の事例を位置づけることとする。なお、近江氏の研究対象は、道路一般に及び、古墳時代から近世以降までの調査事例を検討している。

波板状凹凸面が検出された道路の分類(近江2006)

地形との関係

- I：平坦地で比較的安定した地盤の上を通るもの
- II：平坦地ながら湿地など地盤の緩い部分を通るもの
- III：丘陵部分など緩やかに傾斜する場所を通るもの
- IV：山道や峠など比較的傾斜のきつい場所を通るもの

道路の構築方法

- A：オープンカット工法を用いた道路
- B：盛土工法を行うもの
- C：平坦面をそのまま路面としたか、盛土であったが削平により盛土が確認されなかったもの
- D：平坦面を一度掘削したのち再び盛土を行ったもの

波板状凹凸面の分類(近江2006)

検出面

- I類：硬化面上で検出されているもの
- II類：硬化面以下の軟質面で検出されたもの
- III類：凹凸面周辺も一連の行為により硬化するもの
- IV類：凹凸面と硬化面との関係が不明なもの

路面との平面的な位置関係

- 1：路面中央で路面に直行して検出されたもの
- 2：路面のいずれかの端で路面に直行して検出されたもの
- 3：路面に平行して検出されたもの

波板状凹凸面そのものの形態

- A：楕円形の浅い土坑が近接、もしくは一定の間隔を保ちながら並ぶもの
- B：楕円形ながら、土坑の両側の凹み部が顕著で、断面形状がゆるやかなW字状となるもの
- C：円形の浅い土坑が近接、もしくは一定の間隔で並ぶもの
- D：不整形の土坑が不規則に並ぶもの
- E：一定の間隔を保つが、場所によって土坑の形が一定しないもの

凹凸面の堅さおよび埋土

- ア：底面、側面が硬化し、埋土も硬化しているもの
 イ：底面、側面は硬化しているが、埋土は硬化していないもの
 ウ：底面、側面は硬化していないが、埋土が硬化しているもの
 エ：いずれも硬化していないもの
 オ：不明なもの

以上の分類を行った上で、近江氏は凹凸面の傾向と成因を以下のとおり分析する。

平面形	圧倒的に楕円形ないしは長楕円形のもが一定間隔で検出される例が多い。
規模	幅員が六メートルを超える官道クラスでも一単位あたりの長軸の長さはおおむね三メートル程度にとどまるものが目立つ。
分布範囲	道路遺構では部分的に確認される事例が目立ち、地盤が軟弱な箇所検出される事例や緩斜面で検出される事例が目立つ。
形成痕跡	明確な報告事例は少なく、棒状工具による填圧とされる事例がいくつかある。
断面形状	縦断面形状は均等なもの、一方が深くなるものが拮抗する。一方が深くなる事例の多くは斜面で、傾斜が急な部分は深く平坦地に向かうにつれ深度を浅くし消滅する。
時期	古代になると事例は増加し分布も全国化。楕円形ないし長楕円形、瓢箪形のものについては近世まで存在する。
道路の性格	駅路に伴って確認される事例は希。古代に限れば、道路の性格と直接かかわるものではなく、むしろ道路が通過する地形や地質に関係する。
凹凸面の成因	1 木馬道のように枕木の痕跡と考えられるもの 2 道路の基礎構造と考えられるもの 3 足掛け 4 自然発生的なもの 5 牛馬歩行痕跡

なお、木馬とは山地から木材を搬出する際に用いられた一種の修羅であり、それを滑走させるために路面に枕

木を敷いた（半ば埋め込んだ）道を木馬道とする。重量物運搬という特殊な目的のために敷設された道路と位置づけられるという。足掛けは、本来の形状が階段状を呈するもので、形状が崩れた結果、区分が困難になったと推定している。比較的急な斜面に限られるとする。

近江氏は凹凸面の成因のまとめとして、「波板状凹凸面の多くは地業と考えられ、そのなかで認められる多様性とは、波板状掘削という共通工法に付帯する工法（填圧など）の多様性に起因するとの仮説」を示している。

以上、長い引用となったが、近江氏の分類にあてはめることで、本遺跡の形態的な特徴や問題点を再確認することができる。

(2)本遺跡の検討

分類上の観測点には、感覚的な部分も含まれるため、調査段階における意識的な観察が重要である。本遺跡調査の場合、詳細な観察所見は残されていない。調査資料の制約もあるが、前項の分類に従って検討を加える。

道路自体の分類をみると、粕川右岸縁辺で、地形は平坦地に位置する。立地は自然堤防上にあるが、シルト質土が厚く堆積しており、やや地盤は緩くⅡ類に近い。路面自体の傾斜は緩いが、調査区(中)で計測したところ、0.8%で東に傾斜していた。以上から、最下面(波板状遺構の検出面)は、粕川方向へ向かって緩やかに傾斜していたこととなる。

構築方法は、南斜面の状況から、A類のオープンカット工法とみられる。北側も1号溝に重なってカット面があったものと見なされる。近現代に至るまで道路は継続し、埋没土は厚く路面も最低7面確認できる。しかし、盛土による路面の構築は確認できず、埋没土上面が随時踏み固められた状況と考える。

波板状遺構の分類をみると、検出面は最下面となるが、検出面となる地山面の硬化状況は調査所見がない。状況から、路面との関係が不明なⅣ類に該当しよう。

路面との平面的な位置関係は、路面中央に直行するⅠ類である。

凹凸面そのものの形態は、B類に類する。細長い楕円形で北端は円形の土坑状に凹む。しかし、南端は調査区(西)の場合、平坦のままか逆に高くなるものも見られ、調査区(中)では、重複による欠損もあるが、南側に凹む

ものは非常に少なかった。本遺構の場合、分類上はB類に含まれ、縦断面は柄杓形に近くなっている。凹凸面軸部底面の標高は、調査区(中)で西端から東端で10~15cm程度下降していた。横断面の形態は、軸部がU字形か逆台形で、北端の凹みは逆三角形で、頂部が西側に偏るものがやや多かった。

凹凸面の底面・側面の硬化状況は所見がない。埋没土は「堅くしまる」という所見はある。しかし、上位の道路面に関して、道路硬化面とする層厚は概して厚く、上層が硬化するものか、填圧により全体的に硬化したものの所見記録がない。凹凸面の埋没土も同様であり、こうした状況では不明なもの(オ類)に含めるしかない。

4 まとめ

本遺跡の道路における波板状遺構は、平面形・規模ともに多数例に含まれ、地盤も軟弱であり、近江氏の分析に一致する結果となった。道路の性格としては宮衛周辺地域に位置するが、中世であるため、赤石城など周辺城郭との関係が注目される。

粕川渡河点に位置することも重要な要素と考えられる。粕川左岸の赤城神社には、「下植木赤城神社石造美術群」が造立されている。そうした大型石材の流通路として、水路が使用されたと考えれば、荷揚げされる河岸などでは重量物の運搬が発生してくる。本遺跡は粕川の右岸に位置するが、状況は同じと言える。本遺構が流通路として機能していた場合、粕川を挟んだ東西地域をつなぐと同時に、水上交通路とも接続していた可能性が生じてくる。粕川による水運は確認できないが、赤石城の西を流れる広瀬川は吉利根川であり、水上交通も不可能ではない。波板状遺構が形成された背景には、複数の要因を想定できることとなる。

凹凸面の検出状況は、基礎構造に近い状況である。しかし、埋没土に地業を推測できる特徴はなく、自然発生的な可能性も残る。一方、平面調査ではないが、数次にわたる路面が確認できた状況下において、最下面のみで波板状遺構が検出された状況は重要である。

道路面の作り替えは確認できず、道路の構築は中世に年代比定できる。古代との明確な違いも見られないため、従来の評価と一致して、時代的な要因によって本遺構が形成されたものではない。

地形的な影響があると考えた場合、一時的である以上、立地自体が継続的で主要要因とは考えにくい。一過性の高い遺構と考えれば、何らかの必要性により道路が整備され、波板状遺構が形成されたとみることができる。もとより、前身となる道路があったとしても問題は変わらない。本遺跡の道路が切り土によるオープンカット工法と考えられることから、新たな構築と変わらないからである。

以上を踏まえると、重量物運搬という必要性が現実的と思われる。切り土により道路の傾斜を平均化し、木馬道などにより重量物を運搬したと考えれば、状況に合致してくる。各凹凸面の計測値では、軸部の幅は30cm前後で、深さはほぼ半分当たる10cm程度である。枕木が埋められていたとすれば、それに相応しい規模である。この場合、凹凸面底部の形状が重要となり、底面の硬化状況や底面付近の埋没土の乱れが観察点になってくる。今回の調査では検証できなかったが、今後の調査における課題となる。

引用文献

近江俊秀2006「道路遺構に伴う凹凸について ―波板状凹凸面に対する評価―」『古代国家と道路』青木書店、158-193

写真図版



1. 調査区(中)全景(東から)



2. 調査区(東)全景(西から)



3. 調査区(東)全景(東から)



1. 1号住居全景(東から)



2. 1号住居・2号溝セクション(南西から)



3. 1号住居セクション(南から)



4. 1号住居掘り方セクション(南から)



5. 1号住居P1セクション(西から)



1. 2号住居全景(南から)



2. 2号住居カマド全景(南から)



3. 2号住居セクション(南西から)



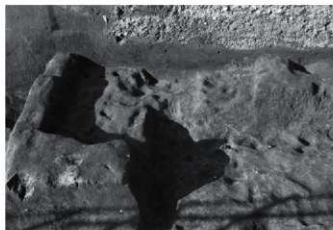
4. 2号住居掘り方全景(南から)



5. 2号住居P3セクション(南から)



1. 3号住居全景(南から)



2. 3号住居掘り方全景(南から)



3. 4号住居全景(南から)



4. 4号住居掘り方全景(南から)



5. 1号井戸全景(南から)



6. 1号井戸下位セクション(南から)



7. 1号粘土採掘坑全景(西から)



8. 1号粘土採掘坑セクション(南から)



1. 2号粘土採掘坑全景(北から)



2. 4号粘土採掘坑セクション(西から)



3. 1号溝・1号道路調査区(西)部分全景(東から)



4. 1号溝Bセクション(西から)



5. 1号溝Cセクション(東から)



1. 1号溝・1号道路調査区(中)部分全景(東から)



2. 1号溝・1号道路調査区(中)部分全景(西から)



3. 1号溝Dセクション(西から)



4. 1号溝Eセクション(西から)



1. 2号溝全景(南から)



2. 3号溝全景(南から)



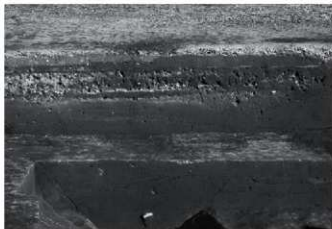
3. 3号溝・1号井戸セクション(南から)



4. 1号道路A・Bセクション(西から)



1. 1号道路Aセクション(西から)



2. 1号道路Bセクション(西から)



3. 1号道路Fセクション(西から)



4. 1号道路波板状遺構Jセクション(北から)



5. 1号道路波板状遺構調査区(中)部分近景(北から)



1. 1号道路波板状遺構古銭出土状態(西から)



2. 旧石器調査3号トレンチセクション(南から)



3. 1号復旧坑群全景(東から)



4. 1号復旧坑群全景(北から)

PL.10

1号住居出土遺物



1



4



5



6

2号住居出土遺物



3



5



6



4



8



9

3・4号住居出土遺物



2(3住)



3(4住)

1号粘土採掘坑出土遺物



3

1号溝出土遺物



1



5



6



7

1号道路出土遺物



1



2



3



4

遺構外出土遺物



1



3

報告書抄録

ふりがな	むねたかみなみいせき
書名	宗高南遺跡
副書名	社会資本整備総合交付金(防災・安全/街路)事業(都)3.4.18号伊勢崎桐生線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	585
編著者名	飯森康広
編集機関	公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20140314
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北碓町大字下箱田784-2
遺跡名ふりがな	むねたかみなみいせき
遺跡名	宗高南遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんいせきしへいわちょう
遺跡所在地	群馬県伊勢崎市平和町
市町村コード	10204
遺跡番号	15214
北緯(日本測地系)	361928
東経(日本測地系)	1391206
北緯(世界測地系)	361940
東経(世界測地系)	1391155
調査期間	20121001-20121031
調査面積	739
調査原因	道路建設
種別	集落/その他
主な時代	古墳/中世/近世
遺跡概要	集落-古墳-竪穴住居4-土器/その他-中世・近世・不明-井戸1+探掘坑4+溝4+道路1+復旧坑1-土器+陶磁器+石製品+金属器
特記事項	古墳時代の竪穴住居4軒のほか、中世に構築された道路1条を検出した。
要約	古墳時代から江戸時代にいたる複合遺跡である。古墳時代の竪穴住居4軒と中世に構築された道路1条と並走する溝1条ほかを検出した。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第585集

宗高南遺跡

社会資本整備総合交付金(防災・安全/街路)事業(都3.4.18号伊勢崎視生線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成26(2014)年3月7日 印刷

平成26(2014)年3月14日 発行

編集・発行/公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/川島美術印刷株式会社